埼玉県戸田市遺跡調査会報告書　第８集

鍛冶谷・新田口遺跡Ⅶ

２００１

戸田市遺跡調査会

埼玉県戸田市遺跡調査会報告書　第８集

鍛冶谷（かじや）・新田口（しんでんぐち）遺跡Ⅶ

２００１

戸田市遺跡調査会

はじめに

戸田市遺跡調査会
会長　岡村政彦

荒川（旧入間川）左岸の自然堤防上にある鍛冶谷・新田口遺跡は、昭和42年にはじめて発掘調査が行われ、弥生時代後期から古墳時代前期の方形周溝墓群として埼玉県選定重要遺跡になっています。

現在、戸田市は東京から20km圏内にあり埼京線の開通など交通の利便性から共同住宅建設等の宅地開発が進み、まちの景観が大きく変化してまいりました。本書は、このような宅地開発の中で埋蔵文化財の保護を目的として緊急に行なわれた第７次発掘調査の貴重な記録です。

東北・上越新幹線及び埼京線の敷設工事に伴って昭和57年から昭和60年の３ケ年間にわたって行われた大規模な調査では、住居跡や方形周溝墓などの遺構が折り重なるように検出されるとともに、土器や木製品など数々の出土品が発掘され考古学上の大きな成果をもたらしました。考古学をはじめ各方面におかれましては、本書を埋蔵文化財の保護と普及活用の資料として、また学術研究の基礎資料として活用していただければ幸に存じます。

最後になりましたが、本発掘調査に多大なご理解とご協力を賜りました株式会社リクルートコスモス北関東支社、直接ご参加くださいました戸田市遺跡調査協力会の皆様に、深く感謝申し上げ、あいさつといたします。

例　　言

1　本書は、埼玉県戸田市上戸田５丁目25番６他の共同住宅建設工事に伴って発掘調査された鍛冶谷・新田口遺跡第７次調査の発掘調査報告書である。

2　発掘調査事業及び整理事業は、共同住宅建設の事業者である株式会社リクルートコスモス北関東支社（埼玉県大宮市宮町１－114－１）から、戸田市遺跡調査会が委託を受けて実施したものである。

3　発掘調査は、平成９年10月20日から11月27日にわたって行った。

4　発掘調査は別表に掲げた調査組織により実施した。

発掘担当者　　小　島　清　一　（戸田市教育委員会　生涯学習課）

5　出土品の整理及び図版の作成は、発掘担当者の指導により、整理参加者全員で行った。

6　本書の作成にあたり、執筆、写真撮影、編集は小島が行い、渡辺豊子、尾形美枝子、岡崎久子の協力を得た。遺構図版及び基本土層図は渡辺、尾形が作成した。

7　発掘調査から報告書を作成するまでの過程で、下記の方々から御教示、御協力を賜った記して謝意を表します。（敬称略）

小畑守二　小要　博　野沢　均　照林敏郎　江原　順
古澤立巳

戸田市立戸田東中学校　戸田市立郷土博物館　戸田市遺跡調査協力会

8　発掘調査及び整理参加者は、下記のとおりである。

上原　勇　榎本真由美　大須賀厚美　岡崎久子　尾形美枝子
桑原裕子　小出美代子　古賀礼子　早乙女孝子　信濃節子
荘　由香　関　徳太郎　高橋富美子　千葉マサ子　寺田加余子
根本　真　平吹久美子　広瀬幸子　本田五月　横山とり
渡辺豊子　渡辺典子

目　　次

はじめに　　戸田市遺跡調査会会長　岡村政彦

例　言

凡　例

1　発掘調査に至るまでの経過 …… 1

2　発掘調査の経過 …… 1

3　鍛冶谷・新田口遺跡の立地と環境 …… 3

4　鍛冶谷・新田口遺跡の概観 …… 5

5　遺構と出土遺物 …… 8

(1)　住居跡と出土遺物 …… 8

(2)　方形周溝墓と出土遺物 …… 20

(3)　土壙と出土遺物 …… 29

(4)　グリッド出土の遺物 …… 38

6　まとめ …… 41

挿　図　目　次

第１図　鍛冶谷・新田口遺跡Ⅶと周辺の遺跡位置図 …… 3
第２図　大正期の鍛冶谷・新田口遺跡周辺の地形図 …… 4
第３図　鍛冶谷・新田口遺跡調査地位置図 …… 5
第４図　基本土層図 …… 6
第５図　鍛冶谷・新田口遺跡Ⅶ遺構配置図 …… 7
第６図　第１号住居跡実測図及び遺物出土位置図 …… 8
第７図　第１号住居跡出土遺物実測図 …… 9
第８図　第２号住居跡実測図 …… 10
第９図　第２号住居跡遺物出土位置図 …… 11
第10図　第２号住居跡出土遺物実測図 …… 11
第11図　第３号住居跡実測図及び遺物出土位置図 …… 12
第12図　第３号住居跡出土遺物実測図 …… 13
第13図　第４号住居跡実測図及び遺物出土位置図 …… 14
第14図　第５号住居跡実測図及び遺物出土位置図 …… 15
第15図　第５号住居跡出土遺物実測図 …… 16
第16図　第６号住居跡実測図及び遺物出土位置図 …… 17
第17図　第６号住居跡出土遺物実測図 …… 18
第18図　第１号方形周溝墓実測図及び遺物出土位置図 …… 21
第19図　第１号方形周溝墓出土遺物実測図 …… 23
第20図　第２号方形周溝墓実測図及び遺物出土位置図 …… 25
第21図　第２号方形周溝墓出土遺物実測図 …… 27
第22図　第１号土壙実測図 …… 29
第23図　第１号土壙出土遺物実測図 …… 30
第24図　第２・３号土壙実測図 …… 31
第25図　第２号土壙出土遺物実測図 …… 32
第26図　第３号土壙出土遺物実測図 …… 34
第27図　第４号土壙実測図 …… 36
第28図　第４号出土遺物実測図 …… 37
第29図　グリッド出土遺物実測図 …… 38

表　目　次

第1表　第1号住居跡出土遺物 …… 9
第2表　第2号住居跡出土遺物 …… 11
第3表　第3号住居跡出土遺物 …… 13
第4表　第5号住居跡出土遺物 …… 16
第5表　第6号住居跡出土遺物 …… 19
第6表　第1号方形周溝墓出土遺物 (1) …… 23
第7表　第1号方形周溝墓出土遺物 (2) …… 24
第8表　第2号方形周溝墓出土遺物 (1) …… 26
第9表　第2号方形周溝墓出土遺物 (2) …… 28
第10表　第1号土壙出土遺物 …… 30
第11表　第2号土壙出土遺物 (1) …… 32
第12表　第2号土壙出土遺物 (2) …… 33
第13表　第3号土壙出土遺物 (1) …… 34
第14表　第3号土壙出土遺物 (2) …… 35
第15表　第4号土壙出土遺物 …… 37
第16表　グリッド出土遺物 (1) …… 39
第17表　グリッド出土遺物 (2) …… 40

図 版 目 次

図版１ (1) 鍛冶谷・新田口遺跡群の位置
(2) 調査区域南側を望む
図版２ (1) 第１号住居跡（西から）
(2) 第２号住居跡（南から）
図版３ (1) 第３号住居跡（東から）
(2) 第４号住居跡（南から）
図版４ (1) 第５号住居跡（南から）
(2) 遺構断面ＳＰＡ北壁際
(3) 遺構断面ＳＰＢ西壁際
(4) 第５号住居跡調査風景
(5) 第５号住居跡調査風景
図版５ (1) 第６号住居跡（北から）
(2) 土器出土状況（第17図－１・３）
図版６ (1) 第１号方形周溝墓（北から）
(2) 遺構断面ＳＰＢ
(3) 北側周溝
(4) 土器出土状況（第19図－２）
(5) 遺構断面ＳＰＣ
図版７ (1) 第２号方形周溝墓（北から）
(2) 土器出土状況
図版８ (1) 遺構断面ＳＰＡ
(2) 遺構断面ＳＰＤ
(3) 土器出土状況（第21図－3）
(4) 土器出土状況
(5) 第２号方形周溝墓調査風景
図版９ (1) 第１号土壙（南から）
(2) 第２・３号土壙（南から）
図版10 (1) 第４号土壙遺構断面
(2) 第４号土壙調査風景
図版11 (1) 第１号住居跡出土遺物（第７図－１）
(2) 第１号住居跡出土遺物（第７図－２）
(3) 第１号住居跡出土遺物（第７図－４）
(4) 第２号住居跡出土遺物（第10図－１）
(5) 第２号住居跡出土遺物（第10図－２）
(6) 第２号住居跡出土遺物（第10図－３）
図版12 (1) 第３号住居跡出土遺物（第12図－２）
(2) 第３号住居跡出土遺物（第12図－３）
(3) 第３・６号住居跡出土遺物
（第12図－１・４、第17図－２）
(4) 第５号住居跡出土遺物（第15図－１）
(5) 第６号住居跡出土遺物（第17図－１）
(6) 第６号住居跡出土遺物（第17図－３）
図版13 (1) 第６号住居跡出土遺物（第17図－４）
(2) 第６号住居跡出土遺物（第17図－６）
(3) 第１号方形周溝墓出土遺物（第19図－１）
(4) 第１号方形周溝墓出土遺物（第19図－２）
(5) 第１号方形周溝墓出土遺物（第19図－３）
(6) 第１号方形周溝墓出土遺物（第19図－10）
図版14 (1) 第２号方形周溝墓出土遺物（第21図－２）
(2) 第２号方形周溝墓出土遺物（第21図－３）
(3) 第２号方形周溝墓出土遺物（第21図－４）
(4) 第２号方形周溝墓出土遺物（第21図－５）
(5) 第２号方形周溝墓出土遺物（第21図－９）
(6) 第２号方形周溝墓出土遺物（第21図－11）
図版15 (1) 第１号土壙出土遺物（第23図－１）
(2) 第２号土壙出土遺物（第25図－１）
(3) (2)甑の底部
(4) 第２号土壙出土遺物（第25図－３）
(5) 第３号土壙出土遺物（第26図－１）
(6) 第３号土壙出土遺物（第26図－２）
図版16 (1) 第３号土壙出土遺物（第26図－６）
(2) 第３号土壙出土遺物（第26図－８）
(3) 第４号土壙出土遺物（第28図－１）
(4) 第４号土壙出土遺物（第26図－３）
(5) 第４号土壙出土遺物（第28図－４）
(6) グリッド出土遺物（第29図－１）

発掘調査の組織

会長	戸田市教育委員会教育長	岡村政彦
理事（会長代理）	戸田市教育委員会教育次長	鮫島大三郎
理事	戸田市文化財保護委員	金子弘
〃	〃	萩原勝明
〃	戸田市開発部都市計画課課長	栗原誠
〃	戸田市開発部都市整備課課長	田部井勇
〃	戸田市建設部建築課課長	熊谷清志
〃	戸田市教育委員会生涯学習課課長	稲垣賢一
監事	戸田市社会教育委委員会委員長	伊藤銀次郎
〃	戸田市立郷土博物館館長	西田賢吉
事務局長	戸田市教育委員会生涯学習課課長	稲垣賢一
事務局員	〃 専門員	原田一夫
〃	〃 主任	山本義幸
〃	〃 主任	細井薫子
調査員	〃 主任	小島清一

凡例

○ 本書に掲載した挿図の縮尺は、原則として遺構図版1／80・1／40、遺物実測図1／4である。それ以外は、図に添えたスケールを参照されたい。

○ 遺構・遺物図中の焼土、炭化物等の標示は次のとおりである。

焼土　炭化物　土器の赤彩部分

○ 土器観察表における胎土の記号は、下記のとおりである。

A：石英　B：金雲母　C：斜長石　D：黒く光る石　E：赤色粒子

F：白色粒子　G：褐色粒子　H：砂粒子

○ 土器観察表における大きさの（　）を付すものは、計測値が推定になる。

○ 土層中の水糸レベルは、すべて標高2.7mである。

1　発掘調査に至るまでの経過

平成９年９月８日、埼玉県大宮市宮町１丁目114番１の株式会社リクルートコスモス北関東支社支社長谷本憲一氏（以下「事業者」という。）から、戸田市上戸田５丁目25番６に共同住宅建設の開発行為に伴う事前協議がなされた。

戸田市では、昭和60年の埼京線の開通により、共同住宅をはじめ事務所建設等の開発が進み、文化財の保護が急務となっている。このような状況において、戸田市教育委員会では開発担当所管課と各種の協議を重ね、文化財保護と開発事業との調整を図っている。

鍛冶谷・新田口遺跡は、昭和42年に初めて発掘調査が行われて以来、弥生時代後期から古墳時代前期にかけての住居跡や方形周溝墓を主体とする集落跡であることが明らかになっている。

このようなことから、市教育委員会では当該地が鍛冶谷・新田口遺跡の包蔵地に位置するため、開発を行う際には文化財保護法に基づき発掘の届出が必要であること、また遺跡の現状を確認するため試掘調査を実施する旨の回答をした。

その後、協議を重ね平成９年９月17・18日の２日間にわたり試掘調査を実施した。結果、開発予定地に弥生時代後期から古墳時代前期の住居跡や方形周溝墓を確認した。市教育委員会では調査結果を踏まえ、その取り扱いについて事業者と協議を行った。現地における遺跡の保存については計画を変更することが困難であることから、事前に記録保存のための発掘調査を実施することになった。

これをもって、事業者からは平成９年10月６日付で、文化財保護法第57条の２第１項の規定による埋蔵文化財発掘届が文化庁長官あてに提出された。発掘調査に際して教育委員会と事業者で協議を行い、事業が緊急を要することを考慮し、戸田市遺跡調査会会長と事業者は平成９年10月16日に事業委託契約を締結した。発掘調査は、平成９年10月20日から開始することになった。

戸田市遺跡調査会からは、文化財保護法第57条第１項に基づく埋蔵文化財発掘調査届が文化庁長官あてに提出された。

なお、埼玉県教育委員会教育長からは、平成９年11月５日付、教文第３の478号をもって発掘届を受理した旨の通知があった。

2　発掘調査の経過　－日誌抄－

鍛冶谷・新田口遺跡第７次発掘調査は、平成９年９月20日から11月27日まで約１カ月という短い期間での調査であった。以下、調査日誌をもとに経過を整理してまとめておきたい。

◇10月20日～10月22日／表土の掘削

10月20日、早朝より関係者が集まり、調査が速やかに運ぶよう調査方法を確認し重機により表土の掘削作業を開始した。掘削にあたっては、試掘調査の結果をもとに遺構確認面である黄褐色土層

まで行った。初日から試掘調査において検出されていた遺構や多量の土器が検出され、関係者全員が緊張し見守るなか慎重に掘削作業を進めた。重機による作業は10月22日に終わり３日間を要した。

◇10月23日～10月27日／遺構の確認

表土が除去され、10月23日から遺構確認作業を始める。西・北側から南に向かって遺構確認面である黄褐色粘土層の精査を丹念に行った。この段階で明らかになった主な遺構は住居跡６軒と方形周溝墓２基で、発掘調査地全域から比較的良好な状態で検出される様子を表していた。なお、基準点測量及びグリッドの設定を10月23日・24日の２日間で行った。

◇10月28日～11月21日／遺構の調査

10月28日から確認された各遺構の調査を行った。第２号方形周溝墓から取りかかり、並行して第５号住居跡などの調査を進めた。遺物の取り上げについては、分布図を作成し記録した。

◇11月25日／全体写真の撮影

調査区域内における遺構の全容を写真に記録するため、作業開始から全員で清掃作業を行い、午後に北側上方から全体の写真撮影を行った。

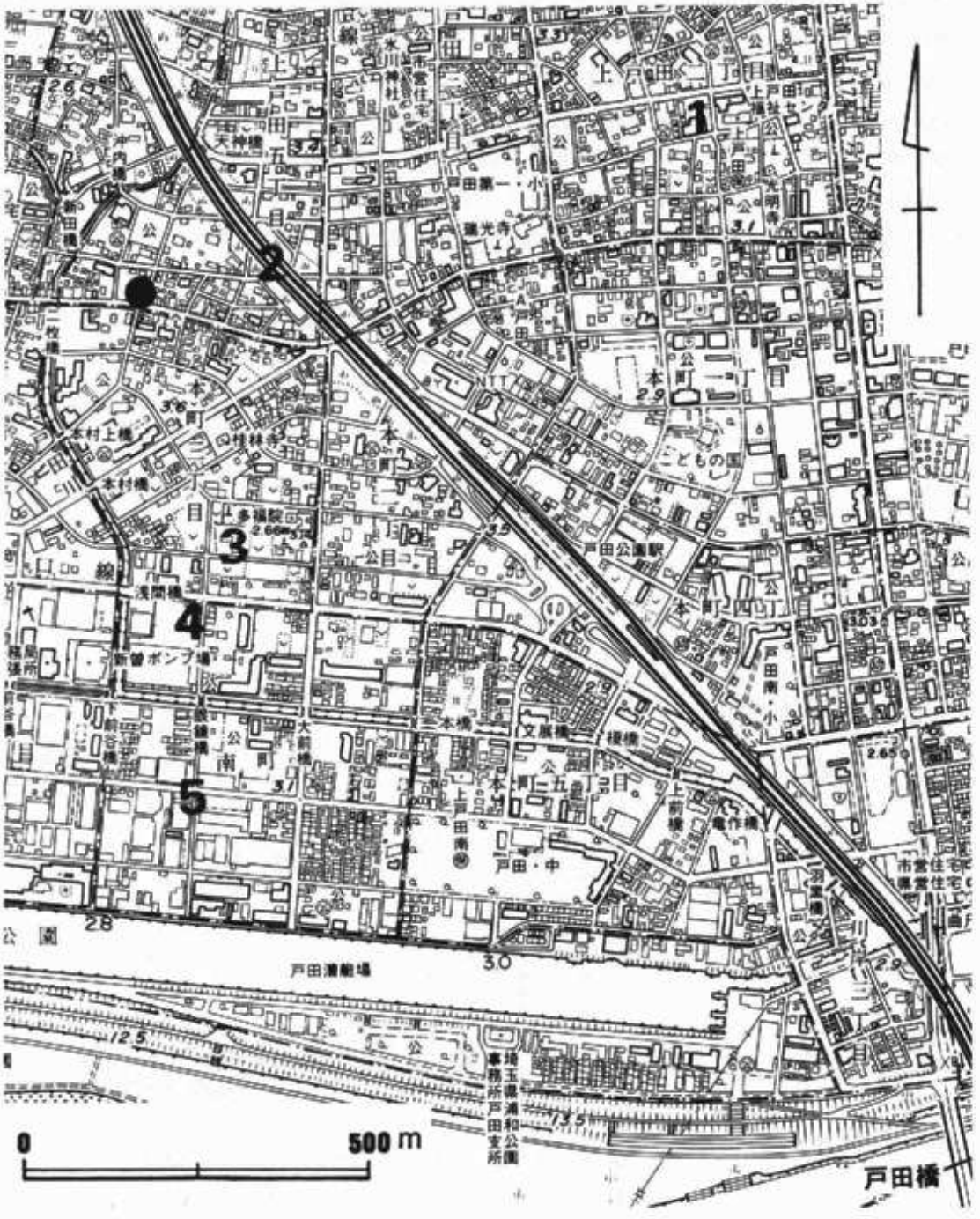
◇11月26日～11月27日／全体図の作成及び測量

11月26日から検出された遺構の全体測量を行う。27日に予定された現地においての全作業を終了し、27日午後に約１カ月を過ごしたプレハブ内の資材を撤収した。

調査日数27日、参加延べ人数329名であった。

調 査 風 景

3　鍛冶谷・新田口遺跡の立地と環境



1．前谷遺跡　2．鍛冶谷・新田口遺跡　3．上戸田本村遺跡　4．南町遺跡
5．南原遺跡　● 鍛冶谷・新田口遺跡Ⅶ

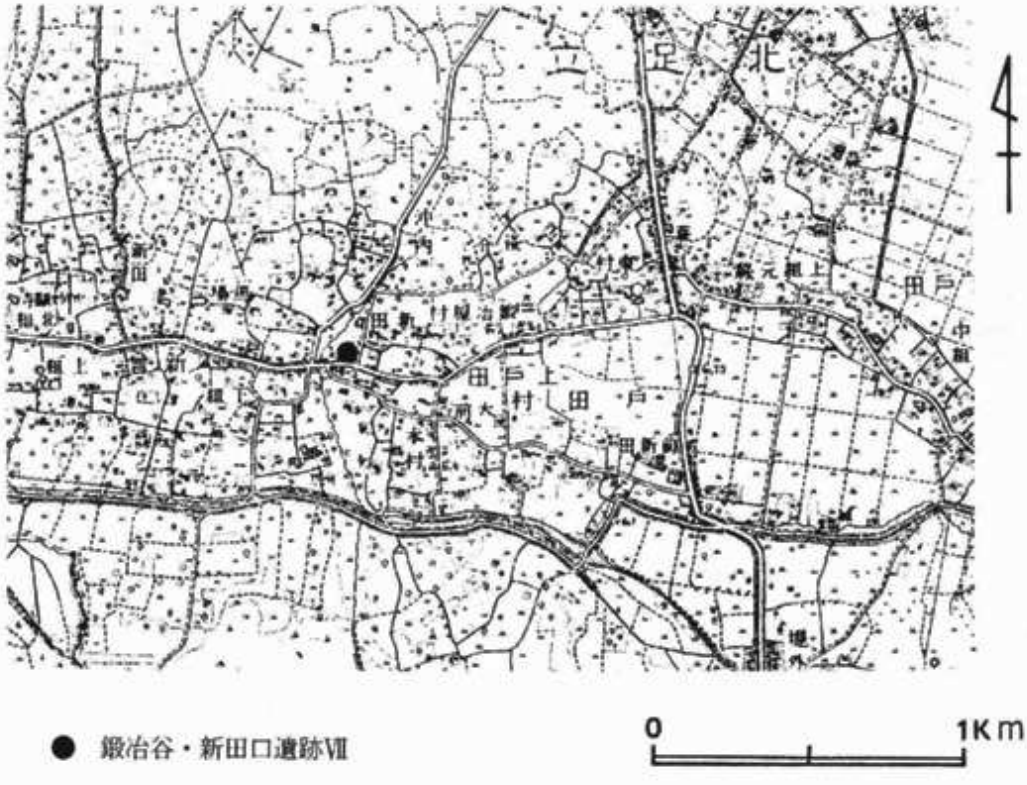
第1図　鍛冶谷・新田口遺跡Ⅶ及び周辺の遺跡位置図

鍛冶谷・新田口遺跡Ⅶ（第７次発掘調査）の調査地は、戸田市上戸田５丁目25番６に位置している。ＪＲ埼京線の「戸田駅」より約600ｍのところにあたる。交通の利便性から共同住宅等の開発が盛んな地域となっている。

戸田市は埼玉県の南端に位置し、東は川口市、北は浦和・蕨両市、西から南は荒川を境とし朝霞・和光両市、そして東京都板橋区・北区と接している。面積は、18.17㎢を測る。東部には中山道が、西部には国道17号バイパスが、中央には東北・上越新幹線及び埼京線が縦断し東京へと通じている。かつて荒川には「戸田の渡し」や「早瀬の渡し」があって江戸への玄関口として交通の要衝となっていたところである。現在、荒川は西部では北西から南東へ流れ、笹目付近で東へと方向を変え南部ではほぼ東西の流路となっている。

こうした周辺地域の状況の下で、埼玉県選定重要遺跡である鍛冶谷・新田口遺跡をはじめ、市内の遺跡群が分布する低平な微高地は、荒川（旧入間川）の溢流によって形成された火山灰質の黄褐色粘土層を基盤としている。標高は４～５ｍを測る。

戸田市内における主な遺跡は市中央部に位置しており、第１図のように前谷遺跡（No.１）、鍛冶谷・新田口遺跡（No.２）、上戸田本村遺跡（No.３）、南町遺跡（No.４）、南原遺跡（No.５）等が上戸田川に添って連なるように遺跡群を形成している。いずれも弥生時代後期から古墳時代の住居跡や方形周溝墓、また中世の堀跡などを検出する集落跡である。

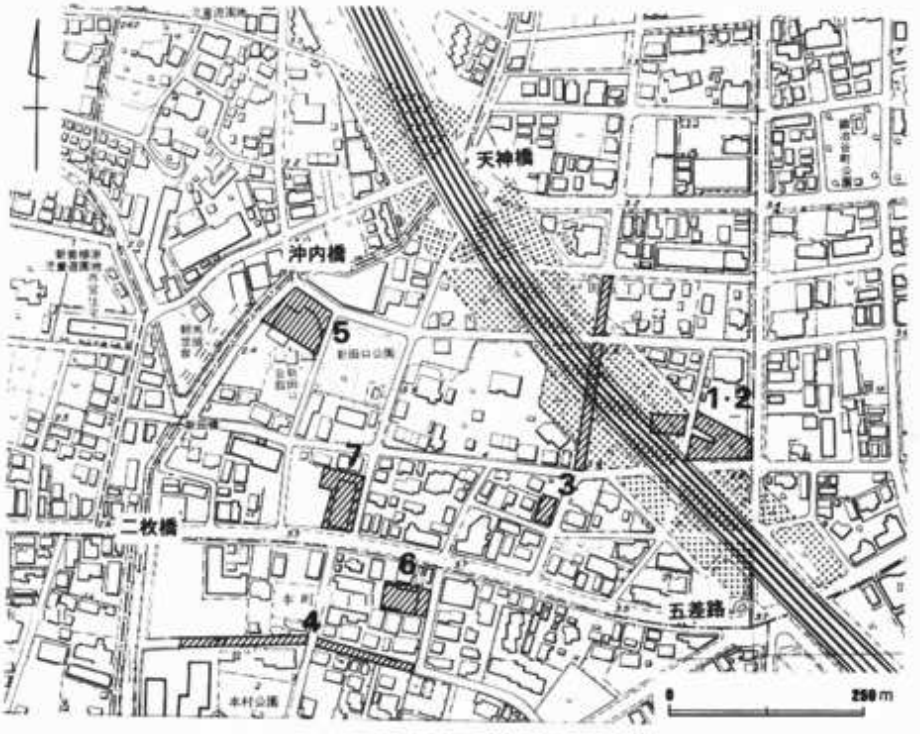


第２図　大正期の鍛冶谷・新田口遺跡周辺の地形図

4　鍛冶谷・新田口遺跡の概観

鍛冶谷・新田口遺跡は、荒川（旧入間川）の溢流によって形成された火山灰質の砂質粘土を基盤とする自然堤防の北端縁に立地している。弥生時代後期から古墳時代前期の方形周溝墓群として昭和51年に埼玉県選定重要遺跡に位置付けられ、これまでの発掘調査によって多数の方形周溝墓や住居跡が折り重なるように構築された大規模な集落跡であることが明らかになっている。

遺跡の名称は、この地域がもとは「鍛冶谷(屋)」「新田口」と称したことに由来する。昭和40年代の早い時期から区画整理がなされ、現在では「上戸田」という地番になっている。したがって、第1次調査においては「鍛冶谷遺跡」として発掘調査が行われている。その後、第2次調査においては新田口地区にも遺跡が及ぶことが確認され『鍛冶谷・新田口遺跡』という名称になっている。



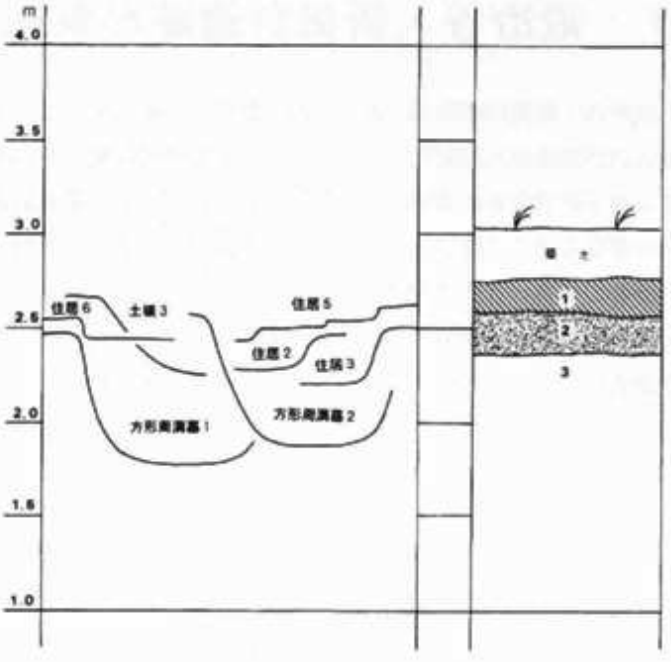
戸田市教育委員会調査
1．第1次（1967）
2．第2次（1968）
3．第3次（1982）
4．第4次（1983）

戸田市遺跡調査会調査
5．第5次（1989）
6．第6次（1992）
7．第7次（1997）

㈶埼玉県埋蔵文化財調査事業団調査
（1982～1984）

第3図　鍛冶谷・新田口遺跡調査地位置図

この遺跡の位置する上戸田村は、江戸時代の末期に編纂された『新編武蔵風土記稿』の上戸田村の項を見ると、「上戸田村ハ郡境荒川ノ岸ニアリ、江戸ヨリノ行程三里、戸田領十一カ村ノ本郷ナリ、古上下戸田及ヒ蕨、塚越ノ四村ヲ合セ戸田村ト唱ヘシト云、サレド正保ノ改ニ載タレバ分村セシハ近世ノ事ニアラス・・・」と記されている（注1）。そして、同書の小名の項には上戸田村として「鍛冶屋　新田　本村　前新田　後谷　東村」の地名があり、第2図の『大正期の鍛冶谷・新田口遺跡周辺の地形図』には「鍛冶屋」「新田」と掲載されている（注2）。なお、現在では「鍛冶谷」「新田口」と称している。



土　層　註

1．明褐色土　黄褐色土粒子を微量、赤褐色粒子を微量、白色微粒子を多量、炭火物を微量含む。粘性、弱。しまり、良。

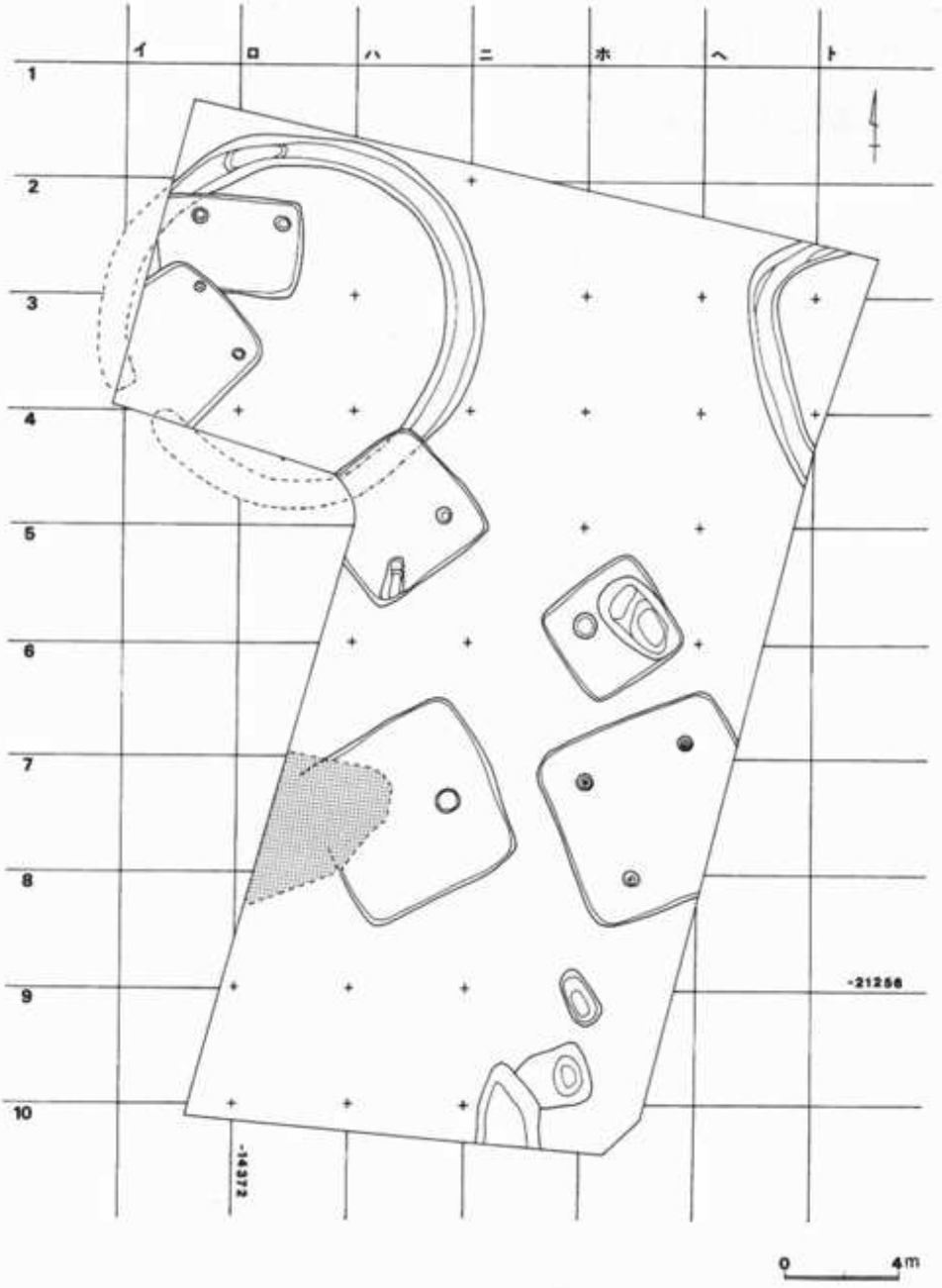
2．暗褐色土　黄褐色土粒子を少量、赤褐色粒子を微量、炭火物を微量含む。粘性、弱。しまり、良。

3．黄褐色土　粘土質土層。基盤の層。粘性、良。しまり、良。

第4図　基本土層図

この遺跡は、戸田市においては発掘調査のはじめとなったところで、その発端は昭和42年に溯ることができる。それは、戸田の郷土史に深い関心をもっていた一市民が、鯉のぼりの柱を立てる作業をしていたときに、一片の土器がエンピの先についていたことにはじまる。その数日後には東側に位置する前谷地区（遺跡）においても水路から弥生土器が偶然に発見され、考古学的発掘調査への機運を一気に高めることになった。これらをきっかけに、発見された土器を慎重に取り扱い、鍛冶谷遺跡において第1次発掘調査が行われている。このとき、弥生時代後期の方形周溝墓が3基検出されている（注3）。以来、市においては本調査を含めると7次にわたり、また昭和60年には東北・上越新幹線及び埼京線の敷設工事に伴って、㈶埼玉県埋蔵文化財調査事業団により約21,000㎡にも及ぶ大規模な調査も行われている（注4）。市街地化が進む本市にあっては、大きな成果となっている。

今まで行われた調査の成果をまとめると、弥生時代後期から古墳時代前期の主な遺構は、住居跡は45軒、方形周溝墓は106基を数えるものとなった。出土品としても壺形土器や甕形土器等の土器類や、勾玉や管玉等の玉類、はしごや斧の柄等の木製品など多数の遺物が検出されており、大規模な集落であることが分かってきている。

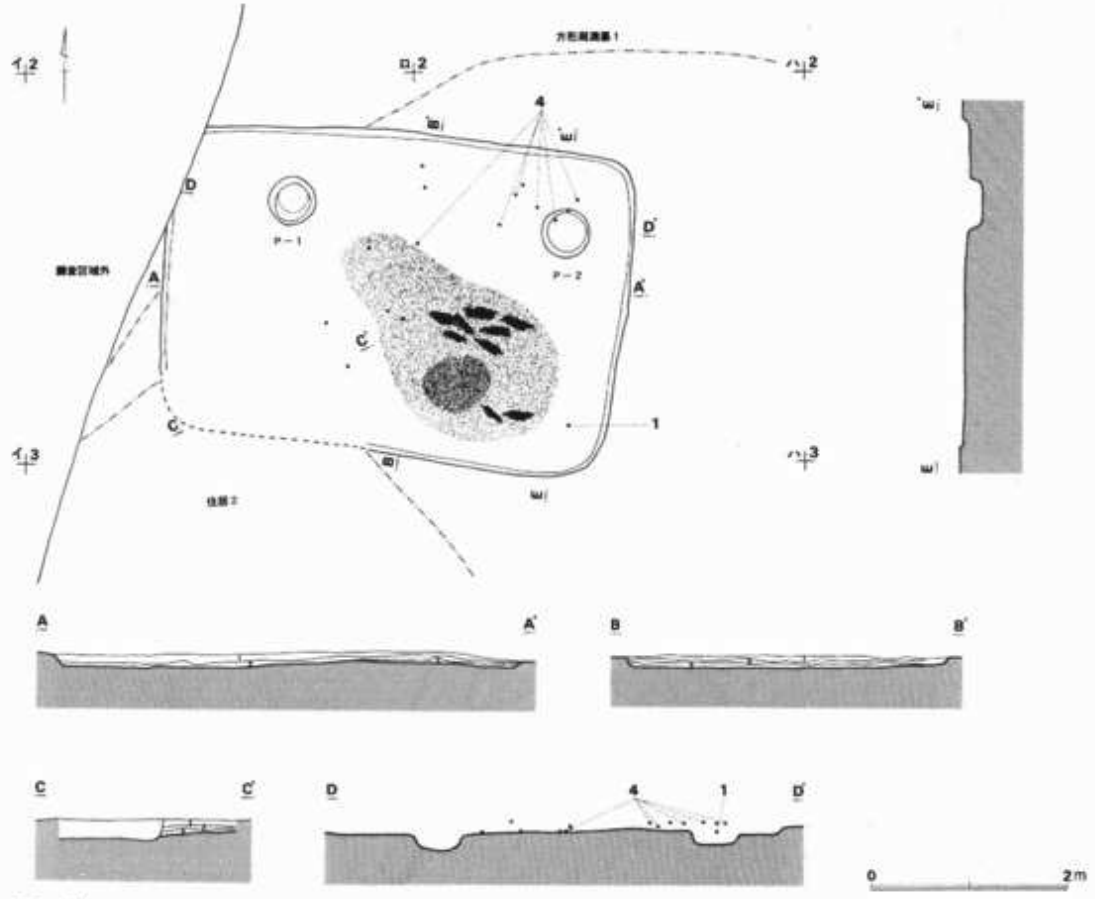


第5図　鍛冶谷・新田口遺跡Ⅶ遺構配置図

注1　『新編武蔵風土記稿』巻之一百四十一　足立郡之七　戸田領
注2　調査地については、現在の地図と照合して推定したもの
注3　『戸田市史　資料編Ⅰ』 1981　戸田市
注4　西口正純　1986 『鍛冶谷・新谷口遺跡』 埼玉県埋蔵文化財調査事業団報告書第62集　㈶埼玉県埋蔵文化財調査事業団

5　遺構と出土遺物

(1)　住居跡と出土遺物



土　層　註

1．明褐色土　　黄褐色土粒子を少量、赤褐色粒子を少量、白色微粒子を多量含む。粘性、弱。しまり、良。

2．明褐色土　　黄褐色土粒子を少量、灰褐色土粒子を多量、赤褐色粒子を微量、白色微粒子を多量含む。粘性、良。しまり、良。

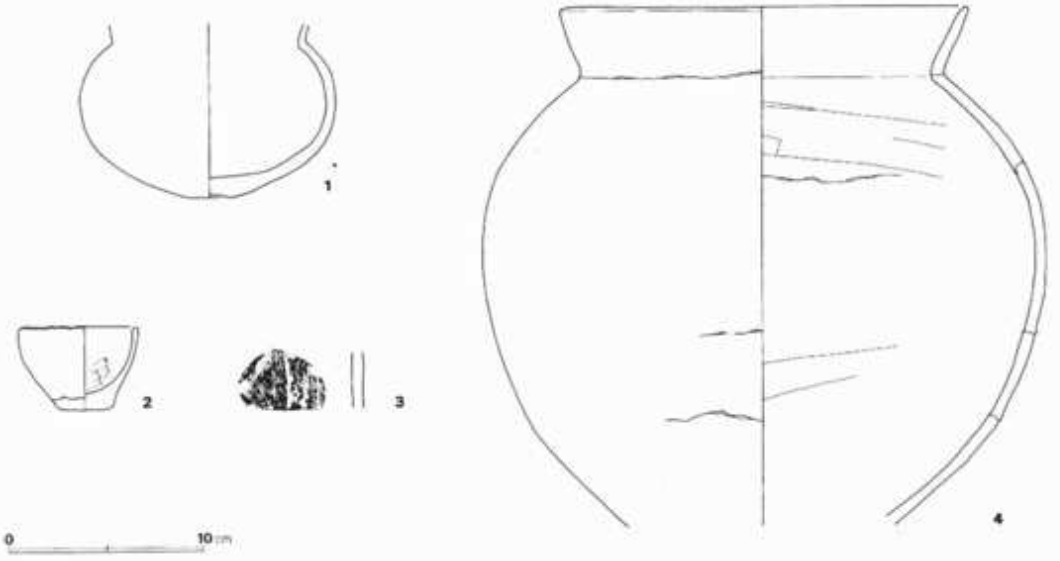
3．明褐色土　　黄褐色土粒子やブロック（φ30mm）を多量、赤褐色粒子を少量含む。焼土や炭火物が床面に付着するように広がっている。粘性、良。しまり、良。

第6図　第1号住居跡実測図及び遺物出土位置図

第1号住居跡（第6図）

調査区の北西側イ～ロ－2グリッドに位置する。第2号住居跡や第1号方形周溝墓の西溝と切り合い構築されている。新旧関係は第2号住居跡よりも古いが、第1号方形周溝墓よりも新しい。本跡は消失家屋で、中央部分より南東側にかけて、覆土の第3層には多量の焼土や炭火物の堆積があり、床面に貼り付くように広がっていた。なお、家屋の柱の部材になるであろう炭火材は見つからなかった。検出された部分での規模は、長径4.8m、短径3.3m、推定面積15.84㎡を測り、方形プランを呈する。

軸偏差は、南北軸がN－85°－Wをとる。床面は、遺構確認面から12.0cmほどの深さで検出され、ほぼ平坦な掘り込みであった。ピットは、コーナー付近から２カ所検出されている。Ｐ１は、長径50cm、短径49cm、床面からの深さ16cmを測り、円形である。Ｐ２は、長径52cm、短径50cm、深さ13cmを測り、円形である。いずれも、掘り込みは浅いものの主柱穴と判断できるものである。遺物は焼土や炭火物に混じって総数15点が出土している。主なものとしては、小型の手づくね土器（No.２）、台付甕形土器（No.４）などが出土している。



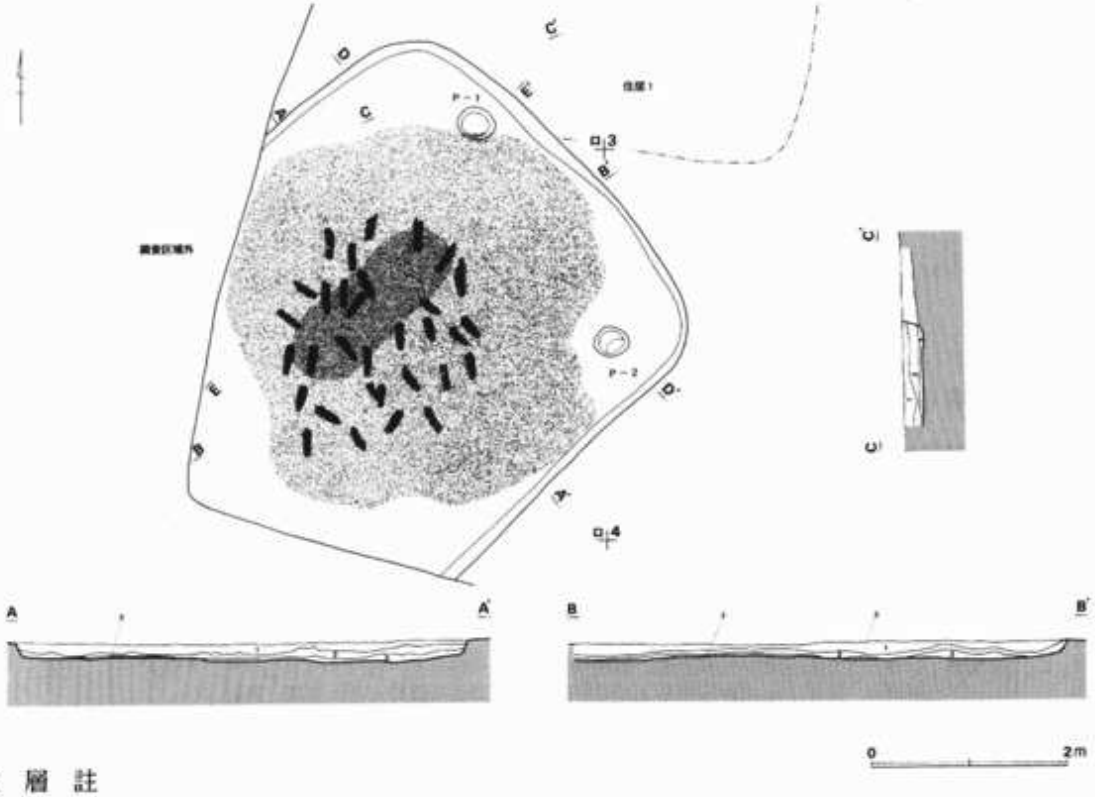
第７図　第１号住居跡出土遺物実測図

第１表　第１号住居跡出土遺物（第７図）

番号	器　種	大きさ（cm）	形態・手法の特徴	胎土・焼成・色調	備　考
1	小型壺	胴径　13.2 底径　2.2	胴部は丸く膨らみ偏球状を呈する。底部は小さく、上げ底となる。口縁部を欠損し、内外面ともに、剥落著しく調整等不明瞭。残存、80%。	胎土　H微、FG少 焼成　やや不良 色調　淡い赤褐色	
2	小型鉢	口径　6.4 底径　2.8 器高　4.4	手づくね土器。底部は小さく厚い作りで、内湾しながら立ち上がる。内面に木口状工具による調整の痕跡がある。残存、70%。	胎土　H微、FG少 焼成　良好 色調　淡褐色	
3	甕		胴部の破片。表部分に約2.5cmの長さで摩擦痕（キズ）が観察できる。	胎土　F少、G多 焼成　やや不良 色調　淡い橙褐色	
4	台付甕	口径　(20.6) 胴径　(28.6)	頸部は「く」の字状に屈曲し、口縁部は短く外傾する。胴部は大きく球形に膨らみ、最大径をやや上半にもつ。外面はナデ調整。口縁部に僅かに木口状工具による整形痕が見られる。内面ナデ調整。残存、30%。脚台部を欠損する。	胎土　H多 焼成　良好 色調　淡い橙褐色	

第２号住居跡（第８・９図）

調査区の西側イ～ロ－２～３グリッドに位置する。第１号住居跡や第１号方形周溝墓の南溝と切り合い構築されている。なお、南・西部分については調査区域外となる。新旧関係は、本跡が最も新しく、床面の調査後において下層から第１号方形周溝墓の開口部にあたる南溝の先端を確認した。本跡は消失家屋で、住居の全面において、覆土の第２層には炭火物が多量に分布していた。検出された部分での規模は、長径5.1m、　短径4.6m、推定面積23.46㎡を測り、南北がやや長くなる長方形プランを呈する。軸偏差は、南北軸がN－45°－Wをとる。床面は、遺構確認面から18.0cmほどの深さで検出され、ほぼ平坦な掘り込みであった。ピットは、東・北コーナー付近から２カ所検出されている。Ｐ１は、長径39cm、短径34cm、床面からの深さ10cmを測り、円形である。Ｐ２は、長径34cm、短径34cm、深さ11cmを測り、底面に小さく段をもつものの円形である。どちらも、掘り込みは浅いが主柱穴と判断し得るものである。遺物は総数８点が出土している。主なものとしては、うすく均整のとれた鉢形土器（No.１・２）や器台形土器（No.３）などが出土している。



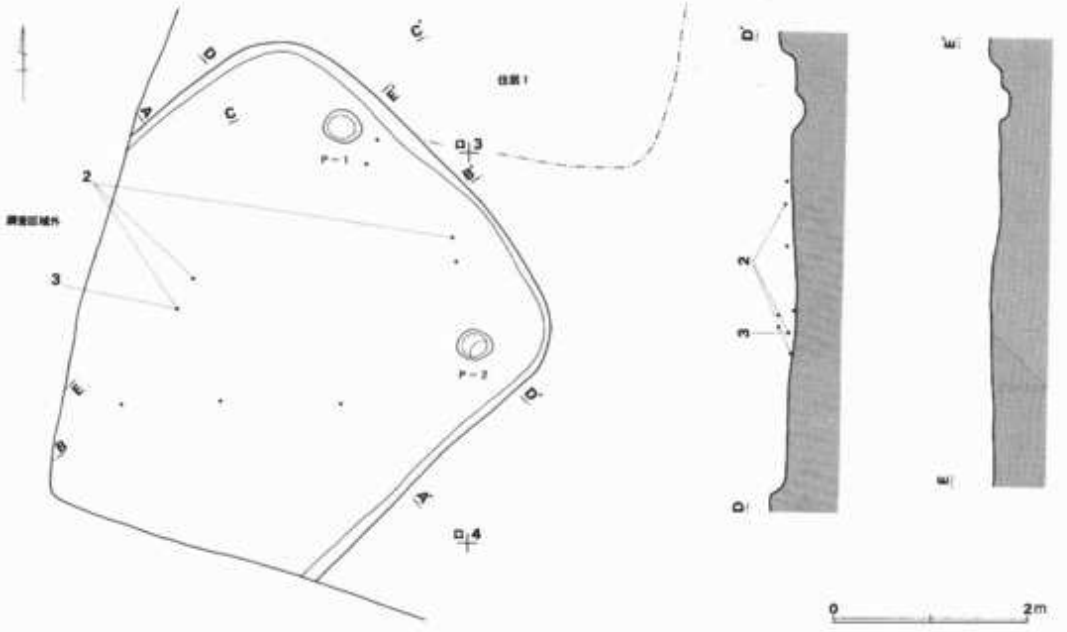
土　層　註

1．明褐色土　　黄褐色土粒子を一様に少量、灰褐色土粒子を少量、赤褐色粒子を一様に少量、白色微粒子を多量含む。粘性、良。しまり、良。

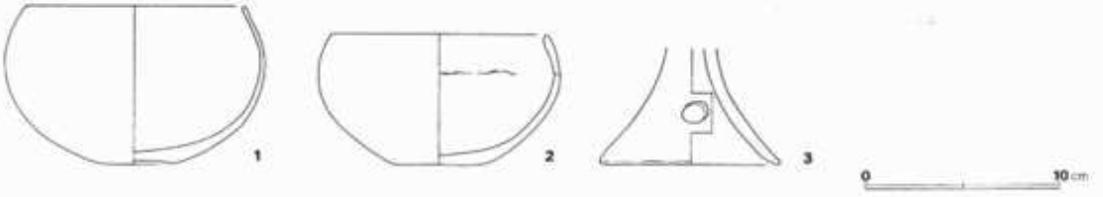
2．明褐色土　　黄褐色土粒子をブロック状に多量、灰褐色土粒子を少量、赤褐色粒子を多量、白色微粒子を多量含む。炭火物を多量に含む。粘性、良。しまり、良。

3．暗褐色土　　黄褐色土粒子少量、灰褐色土粒子をブロック状に多量、白色微粒子を少量含む。粘性、良。しまり、良。

第８図　第２号住居跡実測図



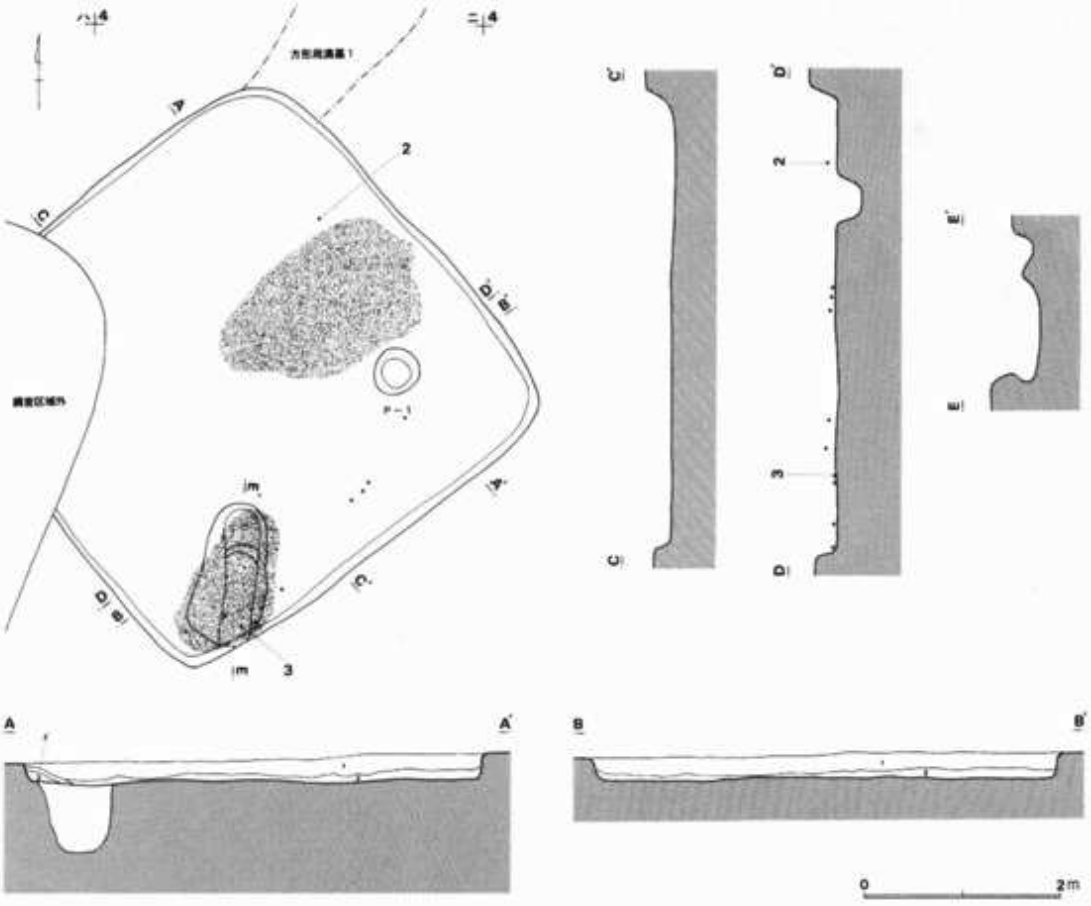
第９図　第２号住居跡遺物出土位置図



第10図　第２号住居跡出土遺物実測図

第２表　第２号住居跡出土遺物（第10図）

番号	器　種	大きさ（cm）	形態・手法の特徴	胎土・焼成・色調	備　考
1	鉢	口径　(11.0) 胴径　(13.2) 器高　8.2	口縁部は薄く、微妙に稜をつくり出す。胴部は丸く膨らみ偏球状を呈する。底部は小さく上底状となる。内外面ともに火を受けて剥落し、調整は不明瞭である。残存、60%。	胎土　H微、G少 焼成　良好 色調　暗い赤褐色	
2	鉢	口径　(10.8) 胴径　12.8 器高　6.8	１と同じつくり、全体的に薄いもので口縁部に平坦面をつくり出す。内外面ともに火を受けて剥落し、調整は不明瞭である。残存、60%。	胎土　FH少、G多 焼成　やや不良 色調　淡い橙褐色	
3	器　台	脚径　(9.2)	緩やかに漏斗状に開く脚部。円孔は３カ所。内外面の調整は剥落が著しく不明瞭。	胎土　EH少 焼成　良好 色調　淡い橙褐色	



土 層 註

1．明 褐 色 土　黄褐色土粒子をまばらに多量、灰褐色土粒子を多量、白色微粒子を多量含む。炭火物を多量に含む。粘性、良。しまり、良。

2．明 褐 色 土　黄褐色土粒子やブロック（φ30〜50mm）を多量、灰褐色土粒子を少量含む。炭火物を少量に含む。粘性、良。しまり、良。

2′．明 褐 色 土　2層に同じであるが、焼土や炭火物がすじ状に堆積している。粘性、良。しまり、良。

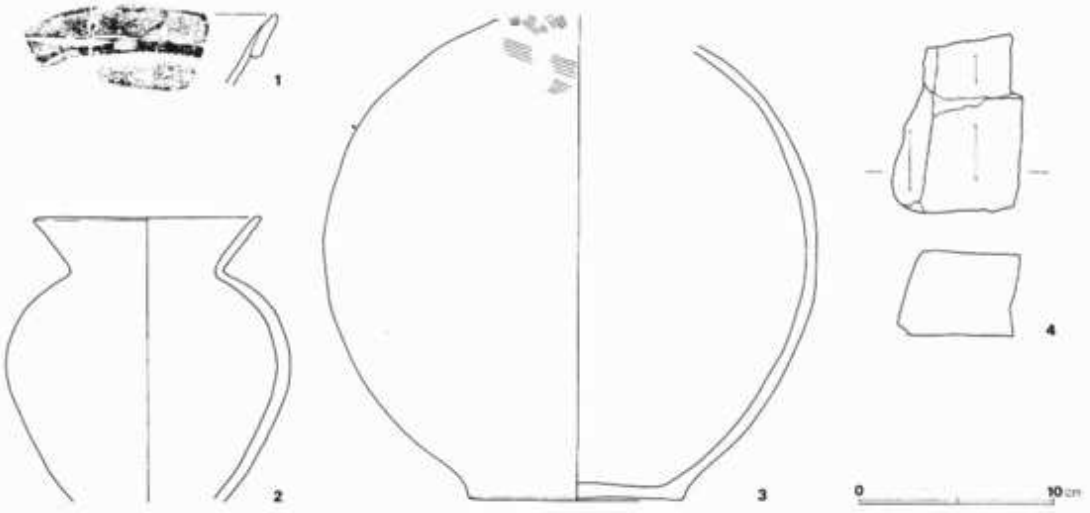
3．明 褐 色 土　黄褐色土粒子を少量、灰褐色土粒子を少量、白色微粒子を多量含む。2層に同じようであるが、黄褐色土ブロックを含まない。粘性、良。しまり、良。

第11図　第3号住居跡実測図及び遺物出土位置図

第3号住居跡（第11図）

調査区の中央ハ〜ニ－4〜5グリッドに位置する。第1号方形周溝墓の東溝と切り合い構築されている。なお、南西コーナー部分については調査区域外となる。新旧関係は、本跡の方が新しい。この住居跡も消失家屋で、覆土の第2層には焼土や炭火物がすじ状に多量に堆積していた。検出された部分での規模は、長径4.8m、短径4.7m、推定面積22.70㎡を測り、ほぼ正方形プランを呈する。軸偏差は、南北軸がN－41°－Wをとる。床面は、遺構確認面から28.0cmほどの深さで検出され、ほぼ平

坦な掘り込みであった。ピットは、東側コーナー付近から１カ所検出されている。Ｐ１は、長径48cm、短径47cm、床面からの深さ26cmを測り、不整楕円形である。また、南コーナーには土壙状の掘り込みがあった。規模は、長径160cm、短径70cm、深さ30cmを測り、南北に長い楕円形で掘り込まれていた。遺物は総数10点が出土している。主なものとしては、やや大型の壺形土器（№３）、小型壺形土器（№２）、砥石（№４）などが出土している。この内、砥石（№４）は第２号土壙出土のものと接合している。



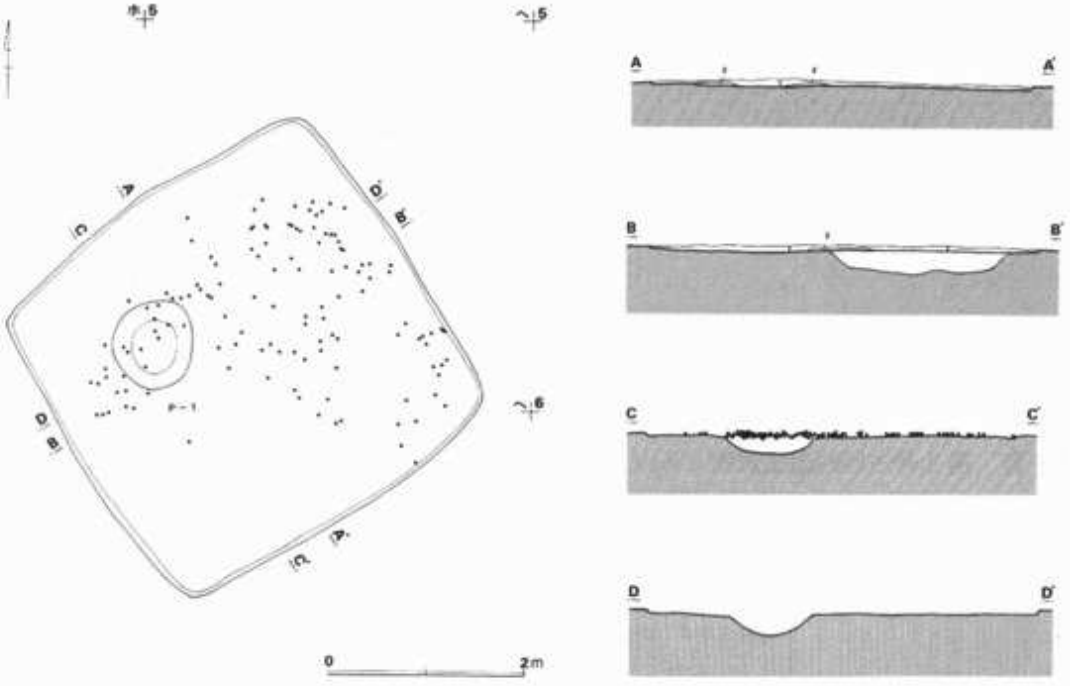
第12図　第３号住居跡出土遺物実測図

第３表　第３号住居跡出土遺物（第12図）

番号	器　種	大きさ（cm）	形態・手法の特徴	胎土・焼成・色調	備　考
1	壺	口径　(14.6)	複合口縁部の破片。複合部に長さ約4.5cmの摩擦痕（キズ）が観察できる。残存、口縁部のみ10%。	胎土　ＨＧ少 焼成　やや不良 色調　淡い灰褐色	
2	小型壺	口径　(11.6) 胴径　14.6	口縁部は外傾しながら短く開く。胴上半部に最大径をもつ。内外面ともに剥落のため調整不明。残存、60%。底部を欠損。	胎土　Ｈ微、Ｇ多 焼成　やや不良 色調　淡褐色	
3	壺	胴径　25.4 底径　11.0	平底から球形に膨らむ胴部。外面は刷毛整形後ナデ調整を加える。内面はナデ調整。残存、70%。口縁部を欠損。	胎土　ＧＨ多 焼成　良好 色調　淡い橙褐色	
4	砥　石	長さ　(9.3) 幅　(6.6) 厚さ　4.3 重さ	表裏及び側面を研ぎ面とする。なお、この資料は第２号土壙のものと接合している。	石質　砂岩 色調　暗灰褐色	

第４号住居跡（第13図）

調査区の中央ニ～ホ－５～６グリッドに位置する。第４号土壙と重複するような形で切り合い構築されている。新旧関係は、本跡の方が新しい。検出された部分での規模は、長径4.0m、短径3.8m、推定面積15.20㎡を測り、各辺がやや膨らむ方形プランを呈する。軸偏差は、南北軸がN－35°－Wをとる。床面は、遺構確認面から4.0cmほどの深さで検出され、ほぼ平坦な浅い掘り込みであった。ピットは、西側コーナー付近から１カ所検出されている。Ｐ１は、長径90cm、短径88cm、床面からの深さ20cmを測り、不整楕円形である。遺物は小破片を含め多数出土している。ただし、主なものとして図示し得るものはなかった。

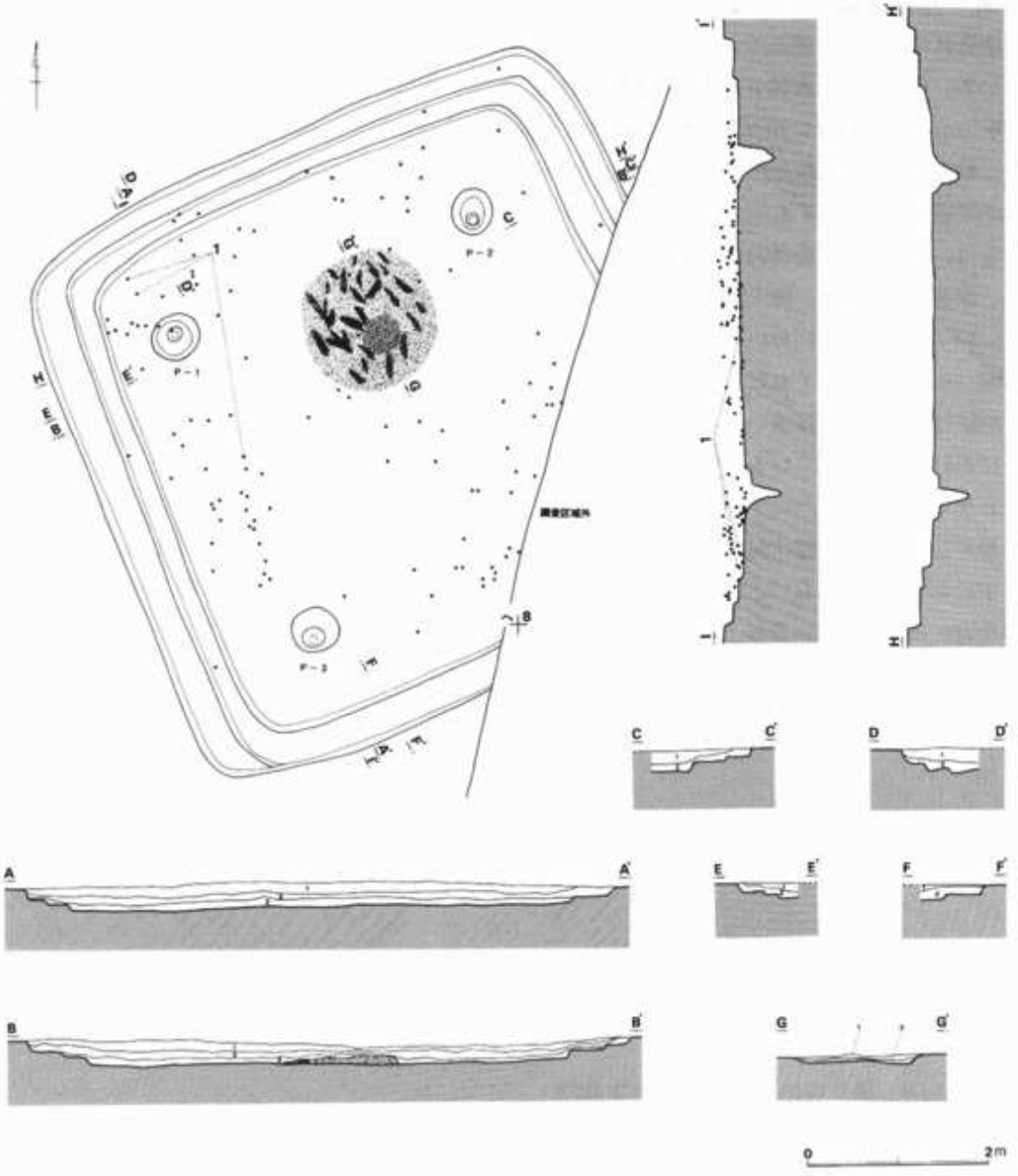


土 層 註

1．暗 褐 色 土　黄褐色土粒子を微量、白色微粒子を一様に多量含む。鉄斑あり。
粘性、良。しまり、良。

1．明 褐 色 土　黄褐色土粒子を少量、白色微粒子を一様に多量含む。粘性、強。しまり、強。

第13図　第４号住居跡実測図及び遺物出土位置図



土 層 註

1．暗 褐 色 土　黄褐色土粒子をごく微量、赤褐色粒子を微量、白色微粒子を多量含む。鉄板あり。
粘性、弱。しまり、良。

2．暗 褐 色 土　黄褐色土粒子を少量、赤褐色粒子を少量、白色微粒子を多量含む。
粘性、弱。しまり、良。

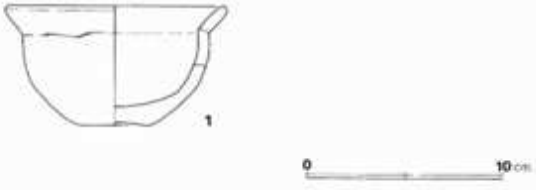
3．灰 褐 色 土　黄褐色土粒子を多量、赤褐色粒子を少量、白色微粒子を少量含む。
粘性、強。しまり、良。

第14図　第５号住居跡実測図及び遺物出土位置図

第５号住居跡（第14図）

調査区の中央やや東側ニ～ヘ－６～８グリッドに位置する。切り合う遺構は無く、単独で構築されている。残念ながら東側コーナーは調査区域外となる。検出された部分での規模は、長径6.8m、短径6.5m、推定面積44.20㎡を測り、比較的大型のもので隅が僅かに丸くなる隅丸方形プランを呈する。軸偏差は、南北軸がN－20°－Wをとる。床面は、遺構確認面から26.0cmほどの深さで検出され、ほぼ平坦な掘り込みであった。ピットは、各コーナーに合わせるような形で３カ所検出されている。Ｐ１は、長径56cm、短径50cm、床面からの深さ39cmを測り、円形である。Ｐ２は、長径52cm、短径44cm、深さ29cmを測り、楕円形である。Ｐ３は、長径52cm、短径50cm、深さ39cmを測り、不整円形である。いずれも、底面においては凹状となる掘り上がりであった。なお、調査区域外となってしまうが東側コーナーにおいてもピットの存在を推測させるものである。

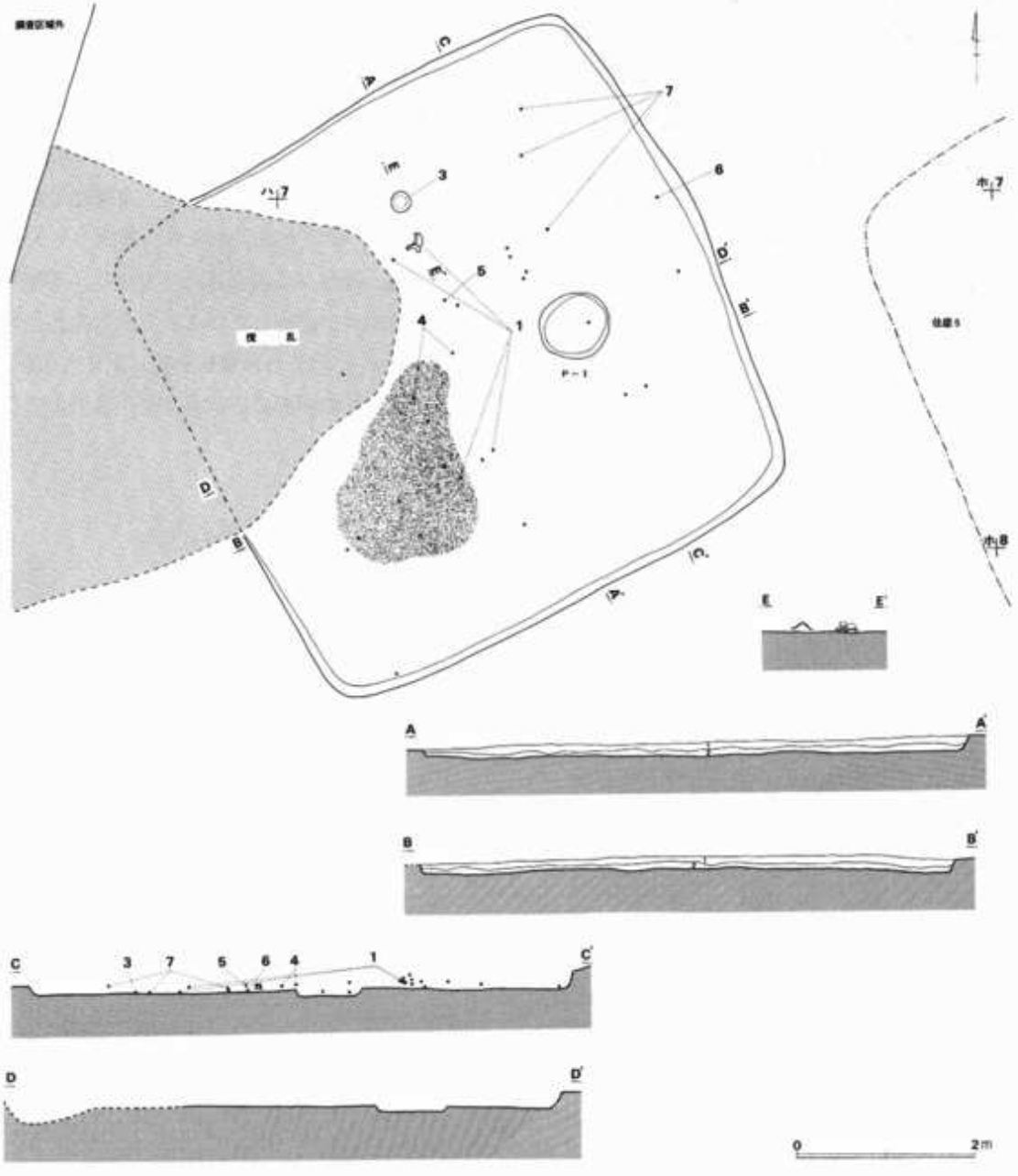
炉跡は、掘り込みは浅いもので炉跡として取り扱ってよいか疑問であるが、焼土塊が中央やや北よりにおいて検出されている。また、本跡は各壁面において段をもつことが確認されている。段は壁に合わせて並行するように２段を築いているものである。調査の過程で、住居の重複あるいは拡張などを想定し、覆土の堆積状況など細かく検証作業を進めたが、覆土は上層からの自然堆積と判断でき、いずれもあてはまらないことから段を伴う住居として報告することにした。遺物は総数116点が住居の全面から出土しているが、小破片が多く図示することができたものは碗形土器（№１）１点だけであった。



第15図　第５号住居跡出土遺物実測図

第４表　第５号住居跡出土遺物（第15図）

番号	器　種	大きさ（cm）	形態・手法の特徴	胎土・焼成・色調	備　考
1	塊	口径　(11.4) 底径　(3.6) 器高　(6.1)	上げ底状の小さな底部。胴部は内湾し立ち上がり、口縁部は短く外傾する。内外面ともに、摩滅著しく調整等は不明。残存、40%。	胎土　H微、E少 焼成　やや不良 色調　淡い橙褐色	



土 層 註

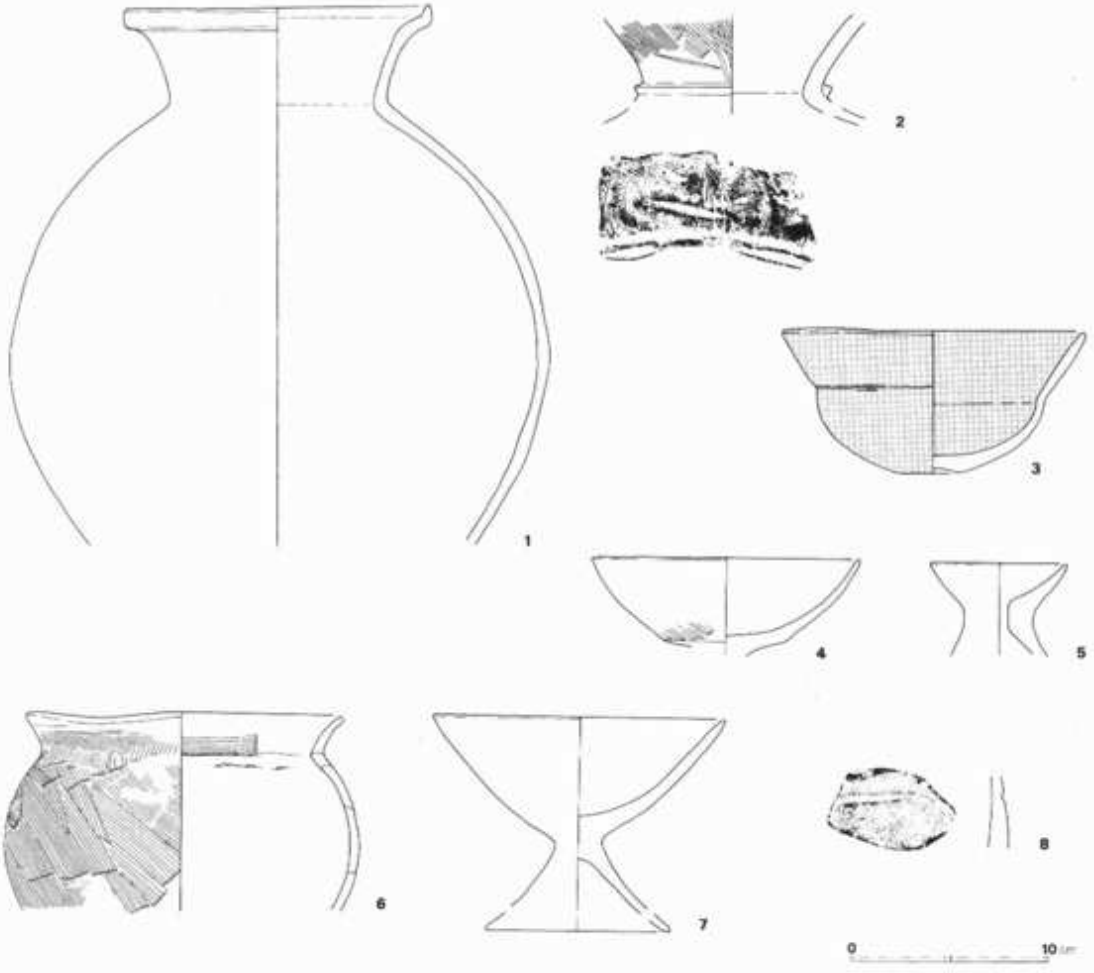
1．暗 褐 色 土　黄褐色土粒子を微量、赤褐色粒子を微量、白色微粒子を多量含む。粘性、良。しまり、良。

2．暗 褐 色 土　黄褐色土粒子を少量、赤褐色粒子を少量、白色微粒子を多量含む。焼土がまばらに堆積する。粘性、良。しまり、良。

第16図　第６号住居跡実測図及び遺物出土位置図

第６号住居跡（第16図）

調査区の南側ロ～ニ－６～８グリッドに位置する。切り合う遺構は無く、単独で構築されている。なお、西側のコーナー部分においては大きく攪乱を受けている。この住居跡は消失家屋としてよいか判断が難しいが、火を受けた痕跡を残すもので、中央部分から南側において、覆土の第２層から焼土や炭火物が多量に検出されている。住居の規模は、長径6.1m、短径6.0m、推定面積36.60㎡を測り、やや大型の正方形プランを呈する。軸偏差は、南北軸がN－25°－Wをとる。床面は、遺構確認面から16.0cmほどの深さで検出され、ほぼ平坦な掘り込みであった。ピットは、中央やや東側コーナー付近から１カ所検出されている。Ｐ１は、長径80cm、短径74cm、床面からの深さ73cmを測り、不整円形である。遺物は中ほどから北側にかけて分布しており、総数29点が出土している。主なものとしては、壺形土器（No.１・２）、坩形土器（No.３）、高坏形土器（No.４・７）、台付甕形土器（No.６）、器台形土器（No.５）などが出土している。なお、台付甕形土器（No.６）の胴部破片は第２号土壙出土のものと接合した資料である。



第17図　第６号住居跡出土遺物実測図

第5表　第6号住居跡出土遺物（第17図）

番号	器種	大きさ（cm）	形態・手法の特徴	胎土・焼成・色調	備考
1	壺	口径　(15.8) 胴径　(27.6)	肩部の張りは弱く、胴部の最大径を中位にもつ。　頸部は小さく収縮し、口縁部にかけて漏斗状に開く。口縁端部は突起状になる。内外面の調整は不明瞭。残存、20%。底部を欠損。	胎土　H多 焼成　やや不良 色調　暗橙褐色	
2	壺		頸部破片で、断面三角形の凸帯を付す。内外面ともに摩滅著しく不明瞭であるが、外面には刷毛整形後箆状工具によるミガキ痕が、内面の一部にもミガキによる調整痕が見られる。また、外面には長さ4.7cmの摩擦痕（キズ）が観察できる。	胎土　G少　FH多 焼成　やや不良 色調　にぶい淡褐色	
3	坩	口径　16.5 胴径　12.0 底径　2.9 器高　7.5	小さな底部でくぼみを有する。胴部は大きく開き、口縁部はさらに開き立ち上がる。内外面ともに丁寧なナデ調整後、赤彩する。口縁の一部を除き、ほぼ完存。	胎土　DH微 焼成　良好 色調　淡い橙褐色	
4	高　坏	口径　(13.8)	接合部から段をもって内湾しながら開く、全体にうすいつくりで、口縁端部は稜をもつ。外面には、僅かに刷毛整形痕が見られるが、丁寧なナデ調整が施される。残存、坏部のみ60%。	胎土　FG少 焼成　やや不良 色調　淡い橙褐色	
5	器　台	口径　(7.0)	小さな器受部で、中は穿孔されている。調整等摩滅しており不明瞭。残存、40%。脚部を欠損する。	胎土　FH少 焼成　良好 色調　淡い橙褐色	
6	台付甕	口径　(16.2) 胴径　(18.4)	球形の胴部。口縁部は短く外傾する。外面及び内面の口縁部は刷毛整形、内面の胴部はナデ調整を施す。残存、20%。脚台部を欠損する。なお、胴部の一部破片は第2号土壙出土の土器と接合したものである。	胎土　GH少　F多 焼成　良好 色調　にぶい橙褐色	
7	高　坏	口径　(15.0)	直線的に開く坏部。内外面ともに摩滅著しく調整等は不明。残存、60%。脚端部を欠損する。	胎土　EH少 焼成　やや不良 色調　淡い橙褐色	
8	壺		胴肩部の破片。内外面ともに調整等不明瞭。外面には、長さ約4.0cmの摩擦痕が観察できる。	胎土　D微　FGH少 焼成　不良 色調　淡い橙褐色	

(2) 方形周溝墓と出土遺物

第1号方形周溝墓（第18図）

調査区の北西側イ～ハ－1～4グリッドに位置する。西側では第1・2号住居跡と、東側では第3号住居跡と切り合っている。新旧関係は本跡が最も古く、周溝が埋没した後にそれぞれの住居が構築されたようである。形態は、南西方向を開口部とするもので、「ハ」の字状のプリッヂを形成している。開口部の位置は中央やや西側にあり、東側から溝がまわり込むような形になっている。北溝は直線的ではなく緩やかに弧を描くように膨らみ、全景では円形周溝墓に近い形を呈している。残念ながら溝の西側と南側は調査区域外となってしまい、辛うじて開口部にあたる溝の先端部分を第2号住居跡の下層から検出した。方台部については竪穴状の掘り込みや柱穴などの存在を期待し遺構確認面の精査を行ったが、攪乱が入っていたこともあり検出することができなかった。遺構の規模は、東西10.8m、南北10.6m、方台部の推定面積は（形態が丸みを帯びるため正確ではないが）およそ114.48㎡である。東溝は長さ9.0m、幅1.2m、深さ90cmを測る。西溝は長さ8.0m、幅1.1m、深さ88cmを測る。北溝は長さ9.0m、幅1.1m、深さ60cmを測る。軸偏差は、南北軸がN－60°－Wをとる。各溝の断面形態は底に行くにしたがいやや細くなる台形で、底面は平坦である。覆土は6層からなっているが、第4層より下部は堅くしまっており堆積した後に踏み固められたようであった。また、東溝と北溝の一部に土器が出土しており、とくに北側部分においては一段深く掘り込まれていたところから土器とともに炭火物が出土している。遺物は多く、小破片を含め総数53点が出土している。主なものとしては、壺形土器（№1）、広口壺形土器（№2・3）、高坏形土器（№10）、台付甕形土器（№12）などが出土している。とくに、高坏形土器は、底面から伏せた状態で出土した。

土 層 註

1．暗褐色土　黄褐色土粒子を微量、赤褐色粒子を微量、白色微粒子を多量、炭火物を微量含む。鉄斑有り。粘性、弱。しまり、良。

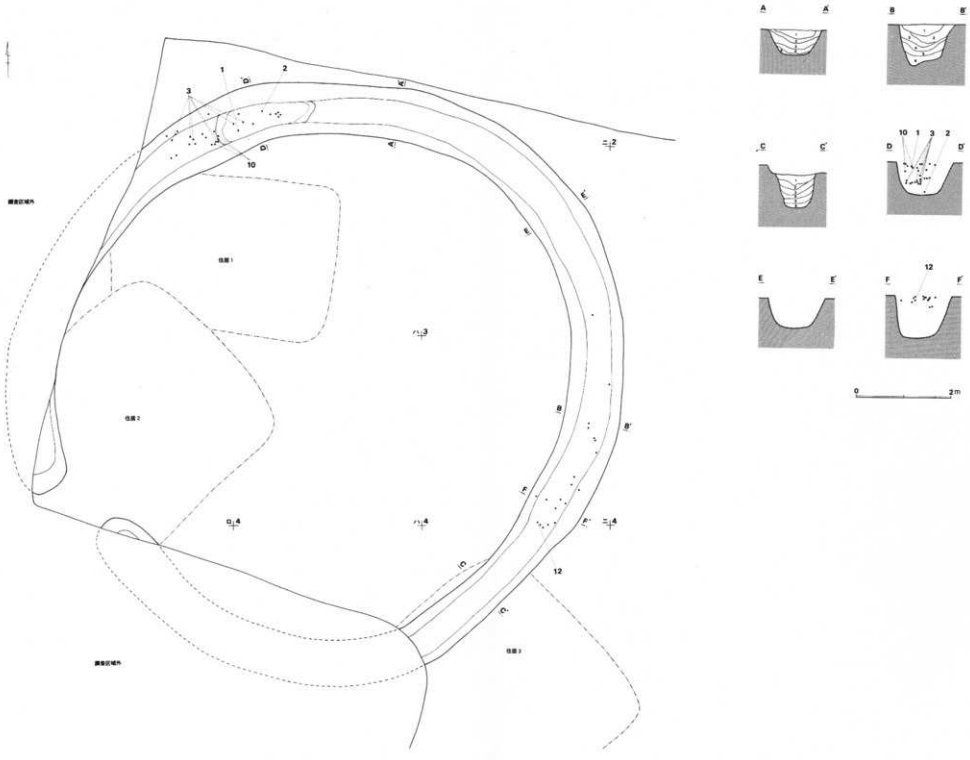
2．黒褐色土　黄褐色土粒子を微量、赤褐色粒子を微量、白色微粒子を多量含む。粘性、強。しまり、強。

3．灰褐色土　黄褐色土粒子を多量、白色微粒子を多量、炭火物を微量含む。粘性、良。しまり、良。

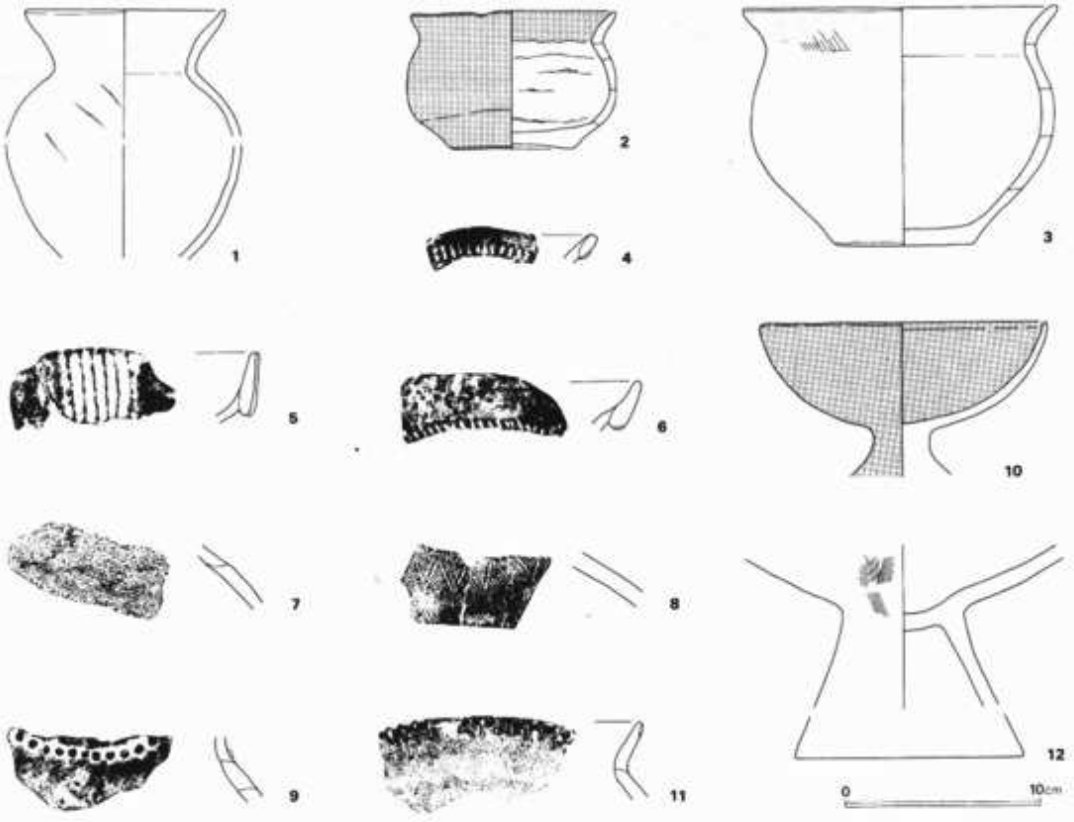
4．黒褐色土　黄褐色土粒子を多量（3層よりも少ない）、白色微粒子を多量、炭火物を含む。粘性、良。しまり、堅緻。

5．黒褐色土　黄褐色土粒子をブロック状に多量、赤褐色粒子を微量、白色微粒子を少量含む。粘性、強。しまり、堅緻。

6．黒褐色土　黄褐色土粒子やブロック状（φ30mm）に多量、赤褐色粒子を微量粘性含む。粘性、強。しまり、強。



第18図　第１号方形周溝墓実測図及び遺物出土位置図



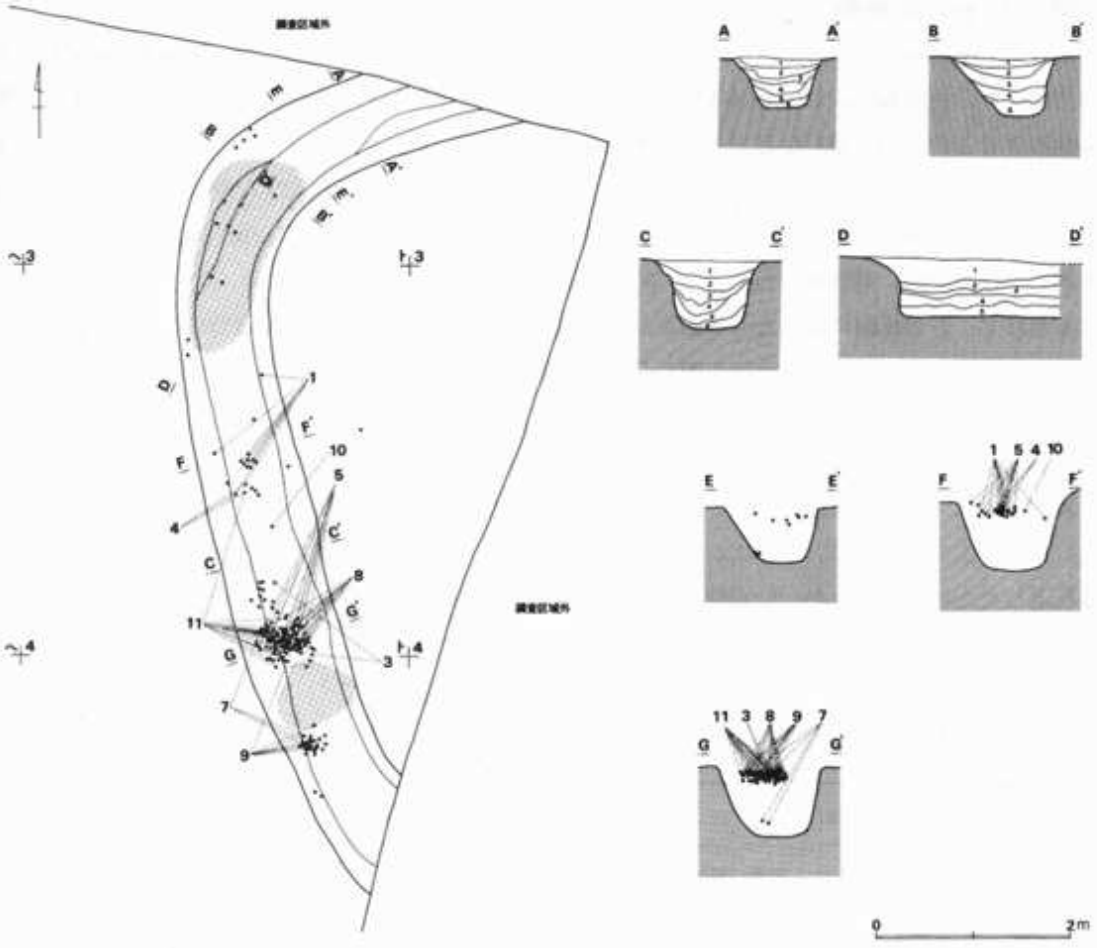
第19図　第１号方形周溝墓出土遺物実測図

第６表　第１号方形周溝墓出土遺物　(1)（第19図）

番号	器　種	大きさ（cm）	形態・手法の特徴	胎土・焼成・色調	備　考
1	小型壺	口径（10. 4） 胴径（12. 3）	胴部の張りは弱く、上半部に最大径を中位にもつ。頸部は小さく収縮し、口縁部にかけて漏斗状に開く。外面は粗いナデ調整（砂粒の動きが見られる）。内面はヘラナデ調整。残存、30%。底部を欠損する。	胎土　GH多 焼成　不良 色調　灰褐色	
2	椀	口径10. 4 胴径10. 6 底径6. 2 器高6. 9	やや偏平ぎみの胴部。外面は粗い刷毛整形後、ナデ調整を施す。内面はナデ調整。外面及び内面の口縁部を赤彩する。残存、80%。	胎土　H多 焼成　良好 色調　淡褐色	
3	広口壺	口径16. 4 胴径15. 6 底径7. 2 器高12. 3	平底。胴部の張りは弱く、口縁部は胴部はよりも外傾する。外面は刷毛整形後ナデ調整を加える。内面は、丁寧なナデ調整。残存、70%。	胎土　E微　GH多 焼成　やや不良 色調　淡い橙褐色	

第7表　第1号方形周溝墓出土遺物　(2)

番号	器　種	大きさ（cm）	形態・手法の特徴	胎土・焼成・色調	備　考
4	壺	口径　(17.2)	幅の狭い複合口縁の破片。下端には木口状工具による刺突を施す。外面の複合部には不明瞭であるが縄文が、内面は丁寧なナデ調整を施す。	胎土　FH少　G多 焼成　やや不良 色調　にぶい茶褐色	
5	壺	口径　(13.8)	複合口縁の破片。複合部外面には、地文として縄文が施され、6本1単位で棒状浮文を付す。内面は丁寧なナデ調整が施される。	胎土　FH多 焼成　良好 色調　にぶい茶褐色	
6	壺	口径　(28.4)	複合口縁の破片。下端には木口状工具による刺突を施す。外面の複合部には不明瞭であるが縄文が、内面は丁寧なナデ調整が施される。	胎土　FH少 焼成　良好 色調　にぶい茶褐色	
7	壺		壺の肩部破片。外面には羽状縄文が施され、S字状結節文で区画する。また、直径1.0cmほどの大きさで円形朱文が付されている。	胎土　H少　FG多 焼成　良好 色調　黒褐色	
8	壺		壺の肩部破片。外面には羽状縄文が施され、沈線による鋸歯状文で区画する。	胎土　FH少　G多 焼成　良好 色調　にぶい灰褐色	
9	壺		壺の肩部破片。外面には縄文が施され、5mm間隔で点浮文が付されている。外面の文様帯を除き赤彩する。	胎土　FG少 焼成　良好（堅緻） 色調　黒褐色	
10	高　坏	口径　14.6	緩やかに内湾しながら立ち上がる坏部。口縁端部は稜をもち、内側には僅かに平旦面を有する。器表面の摩滅が著しく不明瞭であるが、外面は刷毛整形後ヘラミガキが、内面はナデ調整が施される。内外面ともに赤彩される。残存、坏部のみ60%。脚部を欠損する。	胎土　EH多 焼成　良好 色調　淡い橙褐色	
11	台付甕	口径　(21.8)	緩やかに屈曲する頸部。口唇部には刻みを施す。内外面ともに丁寧な刷毛整形。	胎土　FG多 焼成　良好 色調　濃い茶褐色	
12	台付甕		脚台部との接合部。外面は刷毛整形後ナデ調整を加える。内面はナデ調整。甕部内面には煤が付着する。	胎土　H多 焼成　良好 色調　橙褐色	



土 層 註

1．暗 褐 色 土　黄褐色土粒子を微量、赤褐色粒子を微量、白色微粒子を多量含む。鉄斑有り。粘性、弱。しまり、強。

2．暗 褐 色 土　黄褐色土粒子を微量、赤褐色粒子を微量、白色微粒子を多量、炭火物を微量含む。鉄斑あり。粘性、弱。しまり、強。

3．黒 褐 色 土　黄褐色土粒子を多量、赤褐色粒子を微量、灰褐色土粒子を微量、炭火物を多量含む。粘性、良。しまり、良。

4．黒 褐 色 土　黄褐色土粒子を多量、赤褐色粒子を多量、灰褐色土粒子を多量、白色微粒子を少量、炭火物を多量含む。粘性、良。しまり、良。

5．黒 褐 色 土　黄褐色土粒子を多量、赤褐色粒子を少量、灰褐色土粒子を多量、白色微粒子を少量含む。粘性、強。しまり、良。

6．暗灰褐色土　黄褐色土粒子を少量、灰褐色土粒子を多量含む。鉄斑あり。粘性、強。しまり、強。

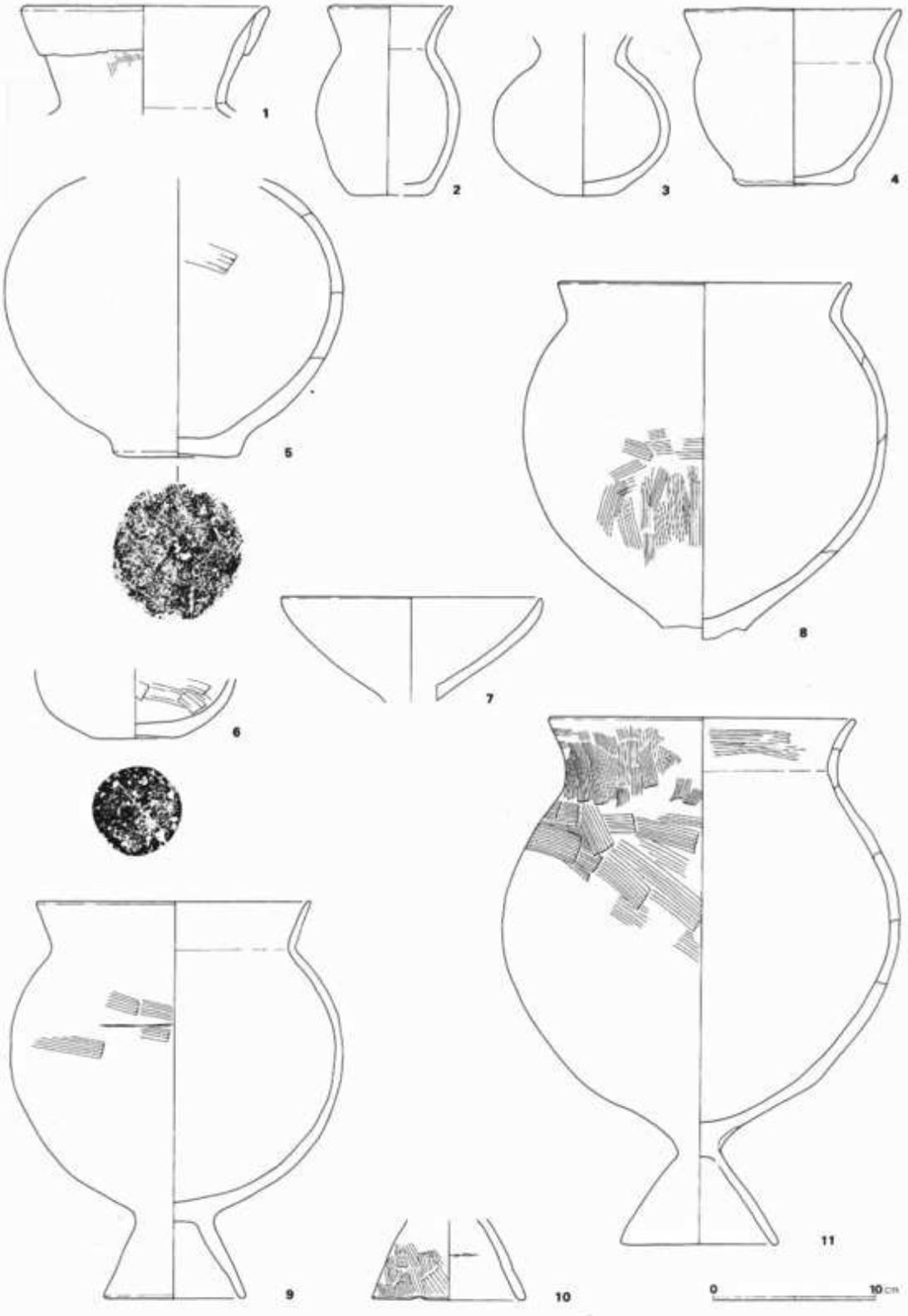
第20図　第２号方形周溝墓実測図及び遺物出土位置図

第２号方形周溝墓（第20図）

調査区の北東隅へ～ト－２～４グリッドに位置する。本跡は、とくに切り合って構築されているものではなく、検出部分においては単独である。形態は、南東方向を開口部とし、方形に溝がめぐる形を推察させるが、開口部となるブリッヂは調査区域外になってしまう。辛うじて北西コーナー部分を起点に西溝と北溝を検出したようなもので、全容を明らかにすることはできなかった。検出された部分の規模は、西溝は長さ7.8m、幅1.0m、深さ74cmを測る。北溝は長さ3.2m、幅0.9m、深さ52cmを測る。軸偏差は、南北軸がN－18°－Wをとる。溝の断面の形態は底面に行くにしたがいやや細くなる台形で、方台部側の掘り方は外側よりも傾斜が強い。底面は平坦で、西溝の中ほど部分においては僅かに深くなっている。覆土は６層からなり、最下層の第６層は堅くしまっている。この遺構は多量に土器が出土しており、覆土の中間層である第３・４層からは多量の炭火物とともに検出された。遺物は小破片を含め総数171点が出土している。主なものとしては、壺形土器（№１・５）、広口壺形土器（№４）、高坏形土器（№７）、小形壺形土器（№２・３・６）、台付甕形土器（№８・９・10・11）などが出土している。とくに、小形壺形土器（№３）横に倒れた状態で出土しており、方台部から転落したものであろうか。いずれにしても、土器の出土状況からすると第５層が堆積した後、時間の経過があり土器を含む層が形成されたものとうかがわれる。

第８表　第２号方形周溝墓出土遺物　(1)（第21図）

番号	器　種	大きさ（cm）	形態・手法の特徴	胎土・焼成・色調	備　考
1	壺	口径　15.4	複合口縁を呈する。頸部から直線的に立ち上がる。内外面ともに剥落が著しく不明瞭であるが、外面には刷毛整形やヘラミガキが残る。内外面ともに赤彩痕あり。残存、口縁部のみ70%。	胎土　ＥＨ多 焼成　やや不良 色調　淡い橙褐色	
2	小型壺	口径　7.6 胴径　(8.8) 底径　(4.8) 器高　11.7	小さな底部。胴部は僅かな膨らみで、口縁部は短く開く。内外面ともに不明瞭であるが、丁寧なナデ調整痕あり。残存、40%。	胎土　ＧＨ多 焼成　良好 色調　にぶい橙褐色	
3	小型壺	胴径　10.8 底径　3.8	小さな平底。球形に膨らむ胴部。頸部は細く収縮する。内外面ともに調整等は不明であるが、肩部には、黒斑を残す。残存、70%。	胎土　Ｈ少　Ｇ多 焼成　良好 色調　にぶい茶褐色	
4	広口壺	口径　13.6 胴径　12.4 底径　7.6 器高　10.8	小さな底部で、胴部の膨らみは弱く、口縁部は短く外傾する。内外面ともに不明瞭であるが、ナデ調整を施す。残存、60%。	胎土　Ａ少　Ｈ多 焼成　良好 色調　にぶい橙褐色	
5	壺	胴径　(21.6) 底径　8.0	大きく球形に膨らむ胴部。外面には不明瞭で図示できないが、ヘラミガキ痕が、内面は丁寧なナデ調整が施される。また、外面の上半部には赤彩痕が、底部には木葉痕が観察できる。残存、胴部40%。底部は完存。	胎土　ＥＧ少　Ｈ多 焼成　良好 色調　淡い橙褐色	



第21図　第２号方形周溝墓出土遺物実測図

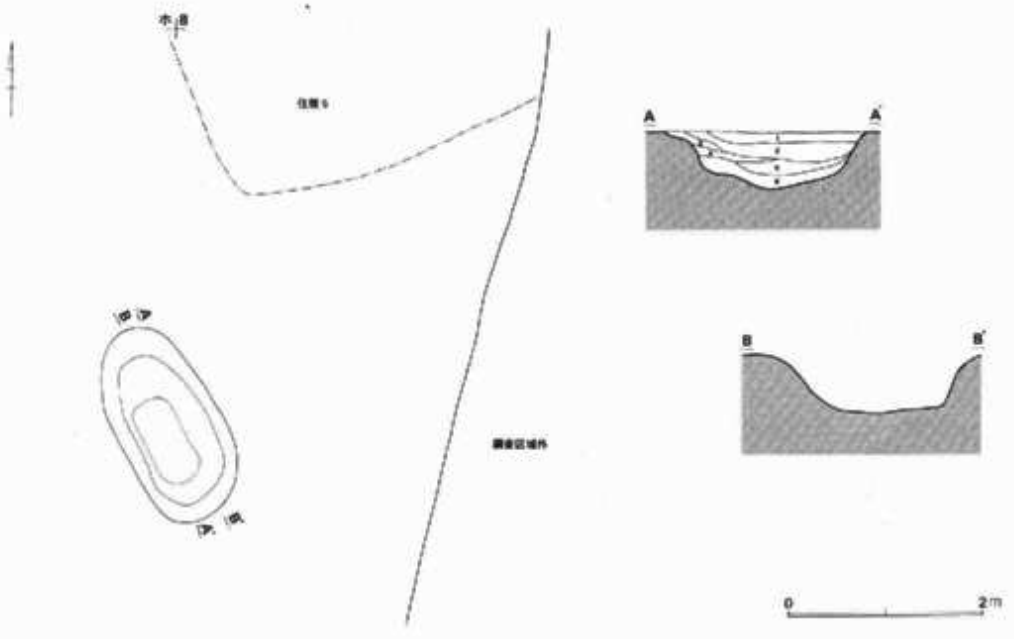
第9表　第2号方形周溝墓出土遺物　(2)

番号	器　種	大きさ（cm）	形態・手法の特徴	胎土・焼成・色調	備　考
6	小型壺	底径　5.2	微妙に上げ底状に削り出された底部。外面には不明瞭で図示できないが、横方向のヘラミガキ痕が、内面は木口状工具によるナデ調整を施す。残存、胴部30%。底部のみ完存。	胎土　H少　FG多 焼成　良好 色調　淡い橙褐色	
7	高　坏	口径　(16.2)	小さな脚接合部から直線的に大きく開く坏部。口縁部付近では、微妙に内湾する。内外面ともに不明瞭であるが、ヘラミガキ後赤彩痕が見られる。残存、坏部のみ60%。	胎土　H多 焼成　良好 色調　淡褐色	
8	台付甕	胴径　(22.3)	胴部の最大径を上半にもつ。口縁部のつくりは小さく直線的に外傾する。外面は刷毛整形後ナデ調整を加える。内面は丁寧なナデ調整。残存、甕部のみ50%。	胎土　BGH少 焼成　やや不良 色調　にぶい橙褐色	
9	台付甕	胴径　23.0 脚径　8.6 器高　24.6	球形に膨らむ胴部。脚台部は甕部に比べて小さなものとなる。外面は刷毛整形後に丁寧なナデ調整を加える。内面は丁寧なナデ調整。残存、60%。口縁部はごく一部である。	胎土　F微　GH少 焼成　やや不良 色調　淡い橙褐色	
10	台付甕	脚径　9.6	脚台部。外面は刷毛整形後にナデ調整を加える。内面は刷毛整形を施す。残存、脚台部のみ完存。	胎土　A少　GH多 焼成　良好 色調　淡い橙褐色	
11	台付甕	口径　19.2 胴径　24.6	球形に膨らむ胴部。頸部は緩やかに外反する。口縁部の一部には、輪積み痕を残す。外面の口縁部から胴部上半にかけては刷毛整形を、下半部はナデを施す。内面の口縁部は刷毛整形、胴部はナデ調整を加える。残存、胴部のみ40%。脚台部を欠損する。	胎土　GH多 焼成　良好 色調　にぶい橙褐色	

(3) 土壙と出土遺物

第1号土壙（第22図）

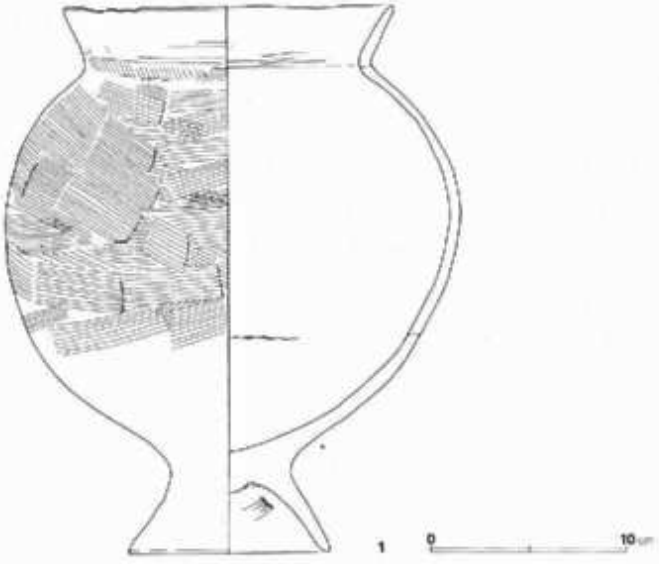
調査区の南側ニ～ホ－8～9グリッドに位置する。本跡はとくに切り合う遺構はなく、単独で存在する。規模は、長径2.1m、短径1.1m、深さ58cm、推定面積2.31㎡を測り、南北に長い不整楕円形を呈する。掘り方は深さ約45cmのところで段をもち、底面は僅かな窪みをもつものの平坦で、すり鉢状に近い形をしている。軸偏差は、南北軸がN－25°－Wをとる。出土した遺物は少ないが、小破片がほとんどである。主なものとしては、台付甕形土器（No.1）などが出土している。



土 層 註

1．暗 褐 色 土　赤褐色粒子を微量、白色微粒子を多量含む。粘性、弱。しまり、良。
2．暗 褐 色 土　黄褐色土粒子を少量、赤褐色粒子を少量、炭火物や土器を多量に含み堆積する。粘性、良。しまり、良。
3．明黒褐色土　赤褐色粒子を微量、白色微粒子を多量含む。粘性、弱。しまり、良。
4．暗黒褐色土　赤褐色粒子を微量、白色微粒子を多量含む。粘性、弱。しまり、良。
5．黒 褐 色 土　黄褐色土粒子を多量、赤褐色粒子を少量、炭火物や土器を多量に含み堆積する。粘性、良。しまり、良。
6．灰 褐 色 土　黄褐色土粒子を少量、白色微粒子を多量含む。底面に土器を堆積する。粘性、良。しまり、良。

第22図　第1号土壙実測図



第23図　第１号土壙出土遺物実測図

第10表　第１号土壙出土遺物（第23図）

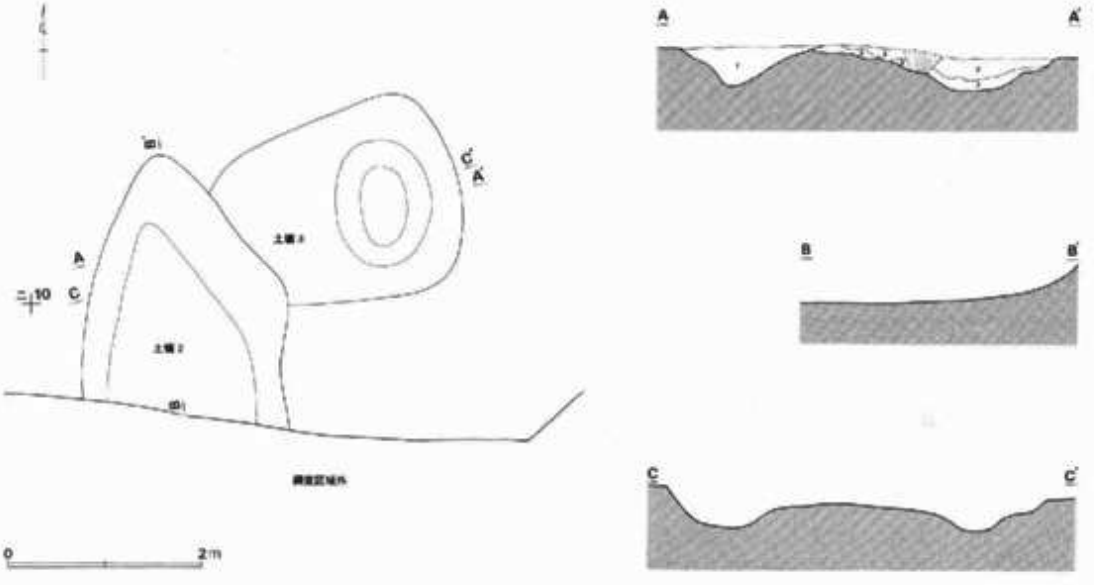
番号	器　種	大きさ（cm）	形態・手法の特徴	胎土・焼成・色調	備　考
1	台付甕	口　径16.8 胴　径23.5 脚　径10.3 器　高28.1	球形に膨らむ胴部。最大径を中位にもつ。頸部は「く」の字に屈曲し、外反する。脚台部は胴部に比べて小さなものとなる。外面は刷毛整形を施し、口縁部にはナデを加える。内面は丁寧なナデ調整。残存、80%。	胎土　E少　FH多 焼成　良好 色調　淡い橙褐色	

第２号土壙（第24図）

調査区の南側ニ－９～10グリッドに位置する。第３号土壙と切り合って構築されているが、新旧関係は本跡の方が新しい。南側は調査区外になってしまう。検出された規模は、長径2.7m、短径1.5m、深さ40cm、推定面積5.4㎡を測り、南北に長い不整楕円形を呈する。掘り方は、底面は平坦であり、北側の壁は緩やかに立ち上がっている。。軸偏差は、南北軸がN－75°－Wをとる。遺物は小破片も含めて多量に出土している。主なものとしては、甑型土器（№１）、坩形土器（№２）、高坏形土器（№３）などが出土しており、また第３号住居跡の砥石（№４）や第６号住居跡の台付甕（№６）の一部は本跡から出土した破片を接合したものである。なお、№４～10の土器については、器表面に鋭利な刃物によると思われる筋状の摩擦痕（キズ）が観察できた。

第３号土壙（第24図）

調査区の南側ニ～ホ－９グリッドに位置する。第２号土壙と切り合って構築されているが、新旧関係は本跡の方が古い。検出された規模は、長径2.6m、短径2.0m、深さ40cm、推定面積5.20㎡を測り、東西に長い不整楕円形を呈する。掘り方は深さ約16cmと約42cmのところで２段になり、すり鉢状に近い形をしている。東側の壁の掘り込みが強く、西側の壁は緩やかに立ち上がっている。軸偏差は、南北軸がＮ－15°－Ｗをとる。遺物は覆土全面から小破片を含めて多量に出土している。主なものとしては、広口壺形土器（№１・２）、壺形土器（№３・４）、台付鉢形土器（№６）、坩形土器（№７）、Ｓ字口縁台付甕形土器（№８）などが出土している。上層においては炭火物に伴って出土している。



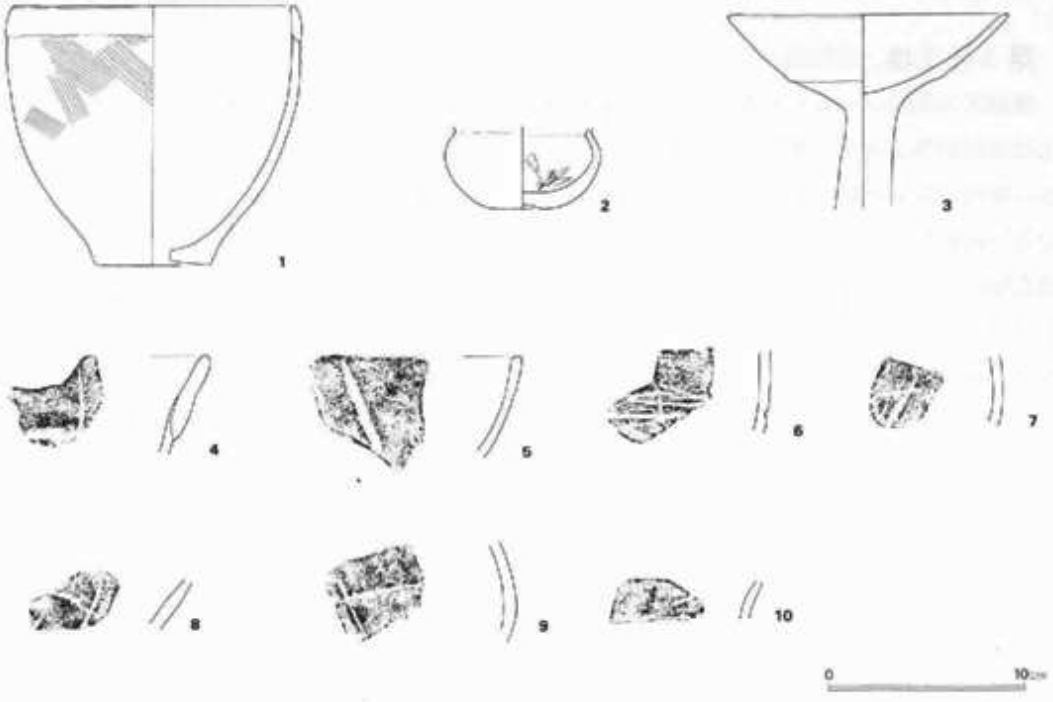
土　層　註

1．暗褐色土　黄褐色土粒子を少量、赤褐色粒子を少量含む。鉄斑があり。
粘性、良。しまり、強。

2．黒褐色土　黄褐色土粒子を少量、白色微粒子を多量、炭火物を少量含む。土器を多量検出。
粘性、良。しまり、強。

3．灰褐色土　黄褐色土粒子を微量、赤褐色粒子を微量、白色微粒子を多量、炭火物を多量含む。土器を少量含む。粘性、強。しまり、強。

第24図　第２・３号土壙実測図



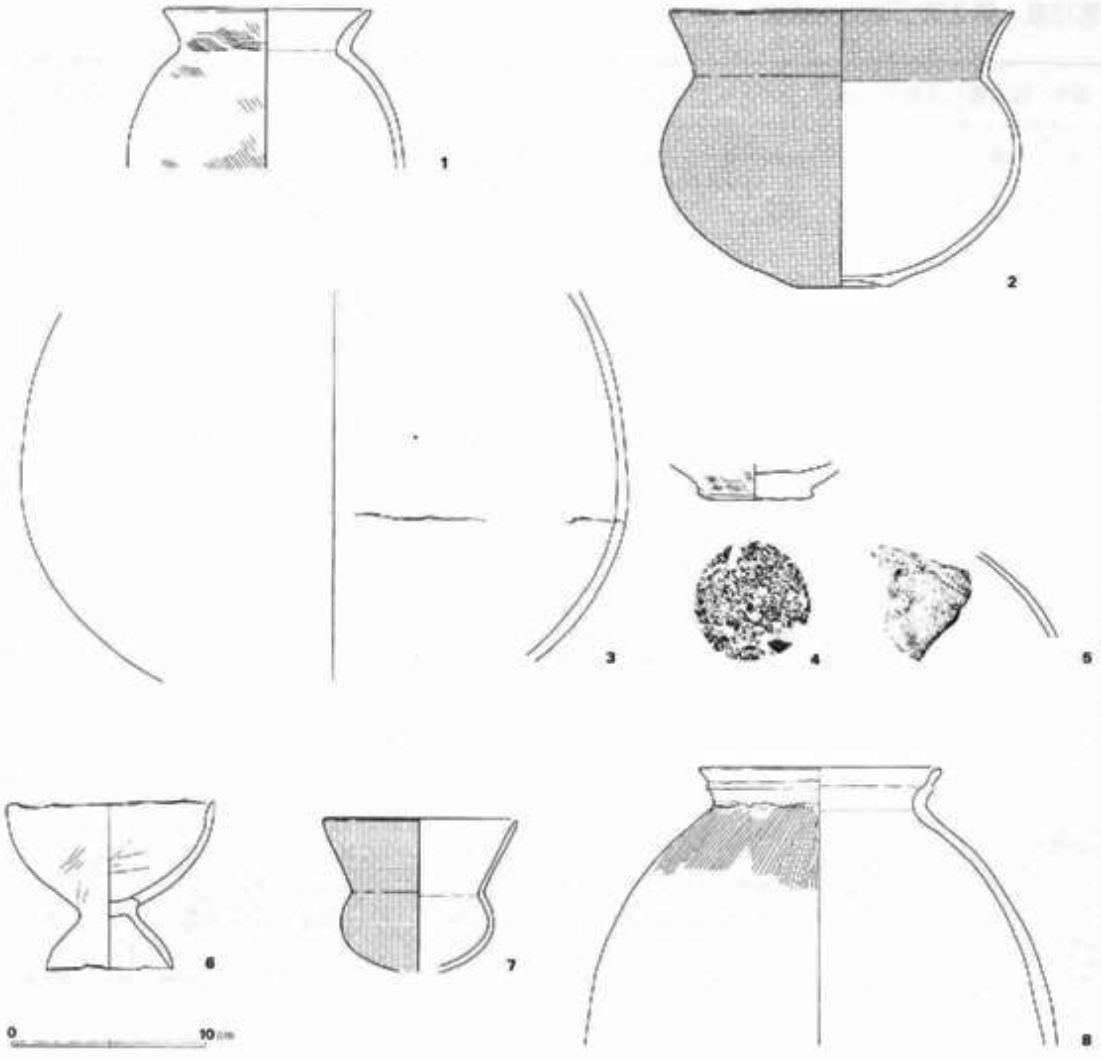
第25図　第２号土壙出土遺物実測図

第11表　第２号土壙出土遺物　(1)（第25図）

番号	器種	大きさ（cm）	形態・手法の特徴	胎土・焼成・色調	備考
1	甕	口径　(15.2) 胴径　(6.0) 器高　12.4	小さな底部に１孔を穿つ。口縁部は複合口縁となる。外面は刷毛整形後ヘラミガキ調整。内面は丁寧なナデ調整を施す。残存、30%。	胎土　H微 焼成　良好 色調　淡い橙褐色	
2	坩	胴径　(8.0) 底径　(2.2) 器高　4.2	小さく偏平なつくりの胴部。底部は上げ底状に削り出されている。内外面ともに摩滅著しく不明瞭であるが、内面にはヘラ状工具による調整痕が残る。胴部に黒斑あり。残存、50%。口縁部を欠損する。	胎土　G多 焼成　やや不良 色調　にぶい橙褐色	
3	高坏	口径　(14.5)	細く柱状となる脚部。坏部は、下半に段をもち内湾しながら開く。うすいつくりである。内外面ともに調整等は不明。残存、50%。脚部下半を欠損する。	胎土　G少 焼成　やや不良 色調　にぶい橙褐色	
4	壺		複合口縁の破片。摩滅著しく調整等は不明であるが、外面には縦方向に長さ3.6cmの摩擦痕（キズ）が観察できる。	胎土　GH少　F多 焼成　やや不良 色調　淡い橙褐色	
5	鉢		内湾する口縁部の破片。摩滅著しく調整等は不明であるが、外面には斜方向に長さ5.3cmの摩擦痕（キズ）がある。	胎土　D微　FH多 焼成　やや不良 色調　にぶい橙褐色	

第12表　第２号土壙出土遺物　(2)

番号	器　種	大きさ（cm）	形態・手法の特徴	胎土・焼成・色調	備　考
6	甕		胴部の破片。摩滅著しく調整等は不明であるが、外面には横方向に２筋の摩擦痕（キズ）がある。	胎土　G少　F多 焼成　良好（堅緻） 色調　にぶい黒褐色	
7	坩		胴部の破片。小破片であり摩滅著しく調整等は不明であるが、外面には６ケ所の摩擦痕(キズ)がある。	胎土　FG少 焼成　良好 色調　淡い橙褐色	
8	壺		胴下半部の小破片。摩滅著しく調整等は不明であるが、外面には斜方向に２筋の摩擦痕(キズ)がある。	胎土　FH少 焼成　やや不良 色調　にぶい橙褐色	
9	壺		胴部の小破片。摩滅著しく調整等は不明であるが、外面には斜方向に１筋の摩擦痕（キズ）がある。	胎土　FH少 焼成　やや不良 色調　にぶい橙褐色	
10	坩		口縁部の小破片。摩滅著しく調整等は不明であるが、外面には４ケ所の摩擦痕（キズ）がある。	胎土　EH少 焼成　不良 色調　淡い橙褐色	



第26図　第３号土壙出土遺物実測図

第13表　第３号土壙出土遺物　(1)（第26図）

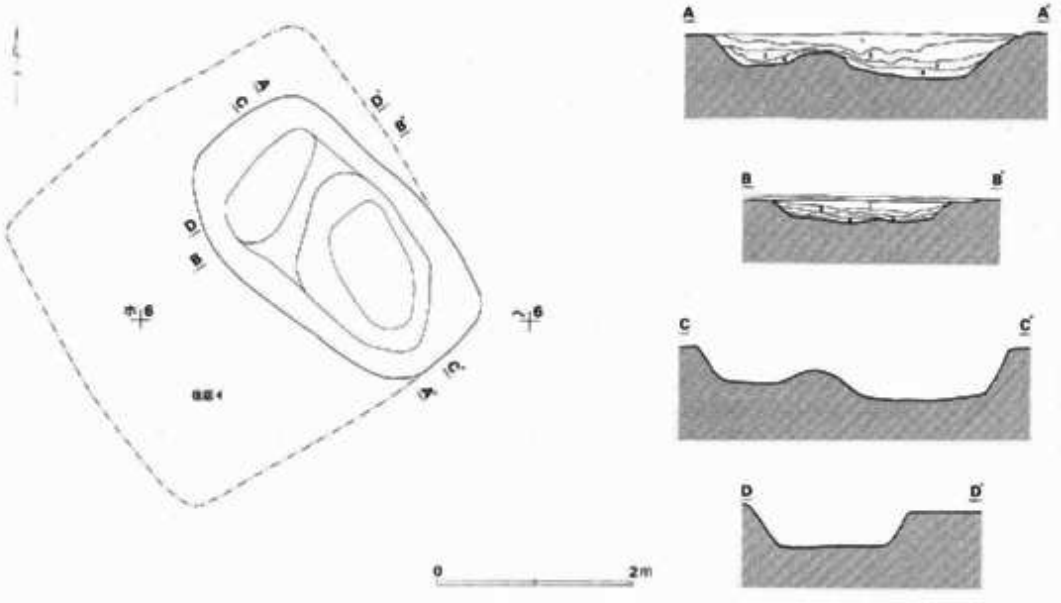
番号	器　種	大きさ（cm）	形態・手法の特徴	胎土・焼成・色調	備　考
1	広口壺	口径　10.6 胴径　(14.2)	やや広口となる口縁部。胴部は丸く球形になる。外面は刷毛調整後にナデ調整を施す。口縁部はヨコナデ。内面はヘラ状工具での削り後、ナデ調整を施す。残存、20%。	胎土　ＦＨ少 焼成　やや不良 色調　にぶい橙褐色	
2	広口壺	口径　(17.6) 胴径　(18.4) 底径　4.6 器高　14.2	上げ底状に削り出された底部。胴部は大きく張り出す。内外面ともに入念に磨かれている。磨き痕は不明であるが、外面と内面の口縁部を赤彩する。残存、40%。	胎土　Ｆ多 焼成　良好 色調　にぶい茶褐色	

第14表　第３号土壙出土遺物　(2)

番号	器　種	大きさ（cm）	形態・手法の特徴	胎土・焼成・色調	備　考
3	壺	胴径　(31.3)	最大径を下半部にもつ胴部。内外面ともに丁寧なナデ調整を施す。内面の下半部には不明瞭で図示できないが、刷毛整形痕を残す。残存、胴部のみ40%。口縁部と底部を欠損。	胎土　ＦＧ多 焼成　良好 色調　にぶい橙褐色	
4	壺		底部の破片。粗雑なつくりで、内外面ともに刷毛整形痕が残る。残存、底部のみ完存。	胎土　ＧＨ少　Ｆ多 焼成　やや不良 色調　淡い橙褐色	
5	坩		うすいつくりの胴部の小破片。摩滅著しく調整等は不明であるが、外面には斜方向に刃物と思われる摩擦痕が観察できる。	胎土　ＦＨ小 焼成　やや不良 色調　にぶい橙褐色	
6	台付鉢	口径　10.7 脚径　6.5 器高　8.6	全体的に小さなつくりである。鉢の部分は湾曲し、小さいながらも深みのあるものである。内外面ともにヘラ状工具によるナデ調整が施されている。残存、90%。	胎土　Ｈ少　ＥＦＧ多 焼成　良好 色調　にぶい橙褐色	
7	坩	口径　(10.0) 胴径　(8.0)	偏平な胴部から大きく開く口縁部。摩滅が著し不明瞭であるが、外面は丁寧なミガキ調整の後赤彩が施されている。残存、30%。底部を欠損する。	胎土　Ｅ多 焼成　やや不良 色調　淡い橙褐色	
8	台付甕	口径　(12.4) 胴径　(14.3)	Ｓ字状口縁。外面は斜方向の刷毛整形を施し、口縁部は横方向のナデ調整を加える。内面は丁丁寧なナデ調整を施す。残存、胴上半部のみ20%。	胎土　ＧＨ少 焼成　良好 色調　淡い橙褐色	

第４号土壙（第27図）

調査区の中央ホ－５～６グリッドに位置する。第４号住居跡と重複するように切り合って構築されている。新旧関係は本跡の方が古く、遺構確認作業では、第４号住居跡に重なってしまい存在を知ることができなかった。第４号住居跡の調査を進めてく過程で明らかになり、住居とは区別して調査を行った。検出された規模は、長径3.1m、短径1.8m、深さ45cm、推定面積5.58㎡を測り、東西に長い不整楕円形を呈する。掘り方は深さ約30cmところで段をもち深くなり、底面は中程に台状の平場を有し２分して掘り込まれている。壁は緩やかな傾斜をもって立ち上がっている。軸偏差は、南北軸がN－44°－Wをとる。遺物は、小破片を含めて多量に出土している。主なものとしては、壺形土器（No.１）、坩形土器（No.３）、高坏形土器（No.４）などが出土している。



土 層 註

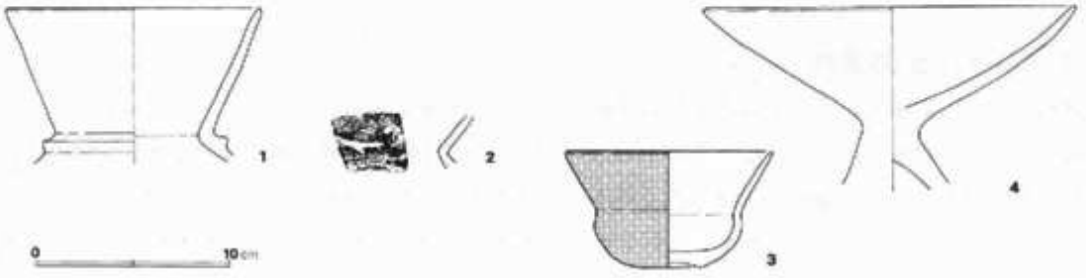
1．黒褐色土　黄褐色土粒子を微量、赤褐色粒子を少量、白色微粒子を多量含む。粘性、良。しまり、良。

2．灰褐色土　黄褐色土粒子を少量、白色微粒子を多量含む。鉄斑あり。粘性、良。しまり、良。

3．灰褐色土　黄褐色土粒子を少量、灰褐色土粒子を少量、白色微粒子を多量含む。炭火物を微量に含む。砂質。鉄斑あり。粘性、良。しまり、強。

4．灰褐色土　黄褐色土粒子を少量、黒褐色土粒子を多量、白色微粒子を多量含む。色調は３層に同じである。粘性、強。しまり、強。

第27図　第４号土壙実測図



第28図　第４号土壙出土遺物実測図

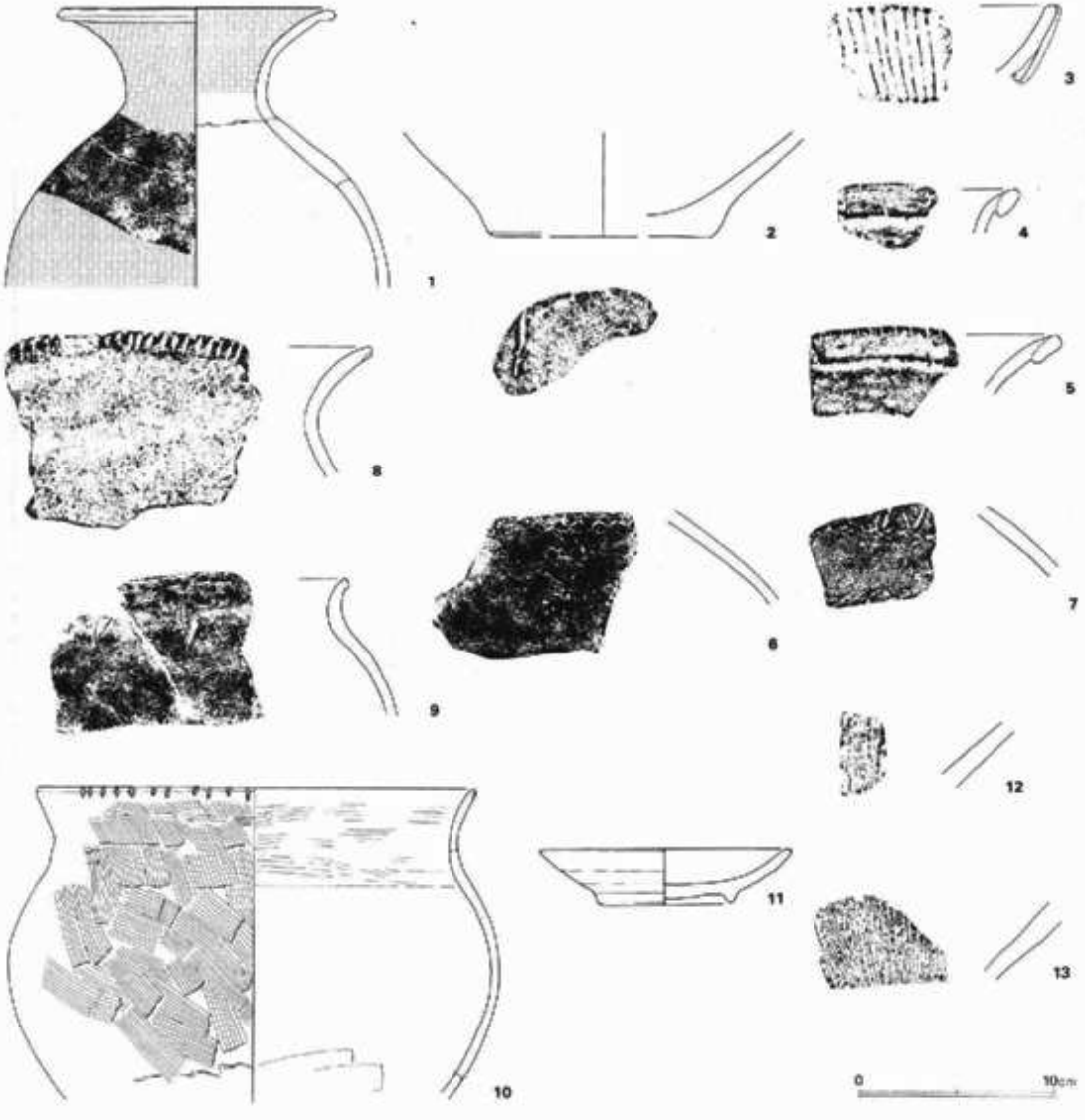
第15表　第４号土壙出土遺物（第28図）

番号	器　種	大きさ（cm）	形態・手法の特徴	胎土・焼成・色調	備　考
1	壺	口径　(13.2)	細い頸部から長く漏斗状に開く口縁部。頸部には断面三角形の凸帯が巡る。内外面ともに調整は不明。残存、口縁部のみ30%。	胎土　G多 焼成　良好 色調　淡い橙褐色	
2	甕		頸部の小破片。外面には斜方向の刃物等による摩擦痕が観察できる。	胎土　G少 焼成　やや不良 色調　淡い橙褐色	
3	甕	口径　(10.6) 胴径　(7.6) 器高　(6.0)	小さく偏平な胴部に、直線的に大きく開く口縁部。内外面ともに調整等は不明瞭であるが、外面には赤彩が見られる。残存、50%。	胎土　H少　E多 焼成　良好 色調　淡い橙褐色	
4	高　坏	口径　(19.4)	大きく直線的に開く坏部。口縁部は微妙に内湾する。内外面ともに調整等は不明瞭であるが、丁寧なヘラミガキ調整の痕跡が見られる。残存、30%。脚部を欠損する。	胎土　G多 焼成　良好 色調　淡い赤褐色	

(4) グリッド出土遺物

グリッド出土の遺物（第29図）

遺構に伴わない遺物、あるいは本発掘調査の前に行われた試掘調査において出土したものをここで掲載した。いずれもグリッドとして取り上げたもので、基本土層中の第２層である暗褐色土層から出土したものである。この遺跡の主体となる弥生時代後期から古墳時代前期の土器は、壺形土器（No.１～３・６～７）、広口壺形土器（No.４・５）、台付甕形土器（No.８～10）である。ほかに中世の瀬戸美濃系の皿（No.11）や常滑系の擂鉢（No.12・13）が出土している。



第29図　グリッド出土遺物実測図

第16表　グリッド出土遺物　(1)（第29図）

番号	器　種	大きさ（cm）	形態・手法の特徴	胎土・焼成・色調	備　考
1	壺	口径　(15.4) 胴径　(20.0)	小さな複合部をもつ口縁部。頸部は細く収縮し胴部は球形になる。外面は丁寧なミガキ後、頸部から肩部にかけて３段の縄文帯を配し、下から２段はＳ字状結節文によって区切られる。内面の口縁部はミガキ後に縄文が、胴部は入念なナデ調整が施される。内面の口縁部及び外面の文様帯を除いて赤彩。残存、30％。胴下半部を欠損する。	胎土　Ｈ少　Ｇ多 焼成　良好 色調　淡い橙褐色	
2	壺	底径　(11.4)	大きな壺の底部。内外面ともに調整等は不明。破損後において二次的に利用されたものか、内面には磨りつぶしたような痕跡があり、底面には刃物等によるものと思われる２筋の摩擦痕が観察できる。残存、底部のみ30％。	胎土　ＦＧＨ多 焼成　やや不良 色調　淡い橙褐色	
3	壺	底径　(11.4)	複合口縁。複合部には断面三角形の棒状浮文を付す。内外面ともに調整等は不明瞭であるが、微妙に赤彩痕が見られる。	胎土　Ｈ少　Ｇ多 焼成　やや不良 色調　淡い橙褐色	
4	広口壺		幅の狭い複合口縁。内外面ともに調整等は不明瞭である。	胎土　Ｆ少　Ｇ多 焼成　やや不良 色調　淡い橙褐色	
5	広口壺	口径　(31.4)	幅の狭い複合口縁。口縁端部には、刺突による刻みが約5.0mm間隔で施される。内外面ともに調整等は不明瞭であるが、赤彩痕が見られる。残存、口縁部のみ５％。	胎土　ＦＧＨ少 焼成　良好 色調　淡い橙褐色	
6	壺		肩部破片。内外面ともに調整等は不明瞭であるが、外面には縄文が施されＳ字状結節文で区画される。	胎土　ＧＨ少 焼成　良好 色調　淡い橙褐色	
7	壺		肩部破片。外面には縄文が施されＳ字状結節文で区画する。さらに、上部には沈線で鋸歯状に描き施文する。外面のみ赤彩。	胎土　ＧＨ少 焼成　良好 色調　淡い橙褐色	
8	台付甕	口径　(27.6)	緩やかに屈曲する頸部。口縁端部には木口状工具により刻みを加える。外面及び内面の口縁部のみ丁寧な刷毛整形。内面の頸部はナデ調整。残存、口縁部のみ10％。	胎土　ＦＧ多 焼成　良好 色調　暗い灰褐色	
9	台付甕		緩やかに短く屈曲する口縁部及び頸部。外面は刷毛整形を施し、口縁部には横方向にナデ調整を加える。内面は口縁部を横方向の刷毛整形、体部はナデ調整を施す。残存、口縁部のみ10％。	胎土　ＧＨ少　Ｆ多 焼成　良好 色調　暗い橙褐色	

第17表　グリッド出土遺物 (2)

番号	器種	大きさ（cm）	形態・手法の特徴	胎土・焼成・色調	備考
10	台付甕	口径 (23.2) 胴径 (25.4)	緩やかに屈曲する頸部。口縁端部には木口状工具により刻みを施す。外面には丁寧な刷毛整形を施し、内面は刷毛整形後にナデ調整を加える。内面の口縁部に刷毛整形痕が残る。残存、20%。底部から脚台部を欠損する。	胎土　FGH少 焼成　良好 色調　にぶい茶褐色	
11	皿	口径 (13.0) 高台径 (7.0)	瀬戸美濃系。削り出し高台。内面及び外面の上部に灰釉を施す。残存、25%。	胎土　H微 焼成　良好 色調　明るい灰褐色	
12	擂鉢		常滑系。小破片のため不明瞭であるが、幅の広い櫛目である。	胎土　H少 焼成　良好（堅緻） 色調　赤褐色	
13	擂鉢		常滑系。小破片のため不明瞭であるが、幅の広い櫛目である。	胎土　H多 焼成　良好（堅緻） 色調　灰褐色	

6　ま　と　め

鍛冶谷・新田口遺跡の発掘調査は、昭和42年に第１次調査が行われて以来この調査で７次を数える。第７次発掘調査の成果としては、弥生時代後期から古墳時代前期の遺構が検出されている。主な遺構は住居跡が６軒、方形周溝墓２基、土壙４基である。ここでは、住居跡と方形周溝墓についてまとめておきたい（註１）。

住　居　跡

住居跡は６軒検出されており、形態と規模について分類を行う。形態は、方形・隅丸方形・長方形、に分けることができる（註２）。また、規模については大型・中型Ａ・中型Ｂに分類することができる（註３）。

方　形：３・４・６	隅丸方形：５	長 方 形：１・２
大　型：５・６	中 型 Ａ：２・３	中 型 Ｂ：１・４

このように分類することができる。形態は、いずれも方形か隅が僅かに丸くなる方形である。規模は第５号住居跡のように大型の中でも大きさを感じるもので、この遺跡の中では最も大きい部類であった。この調査地内で検出された住居跡は、第１・２号住居跡が切り合う以外は単独で構築され、それぞれの主軸が同じ南西方向をとっていた。また、住居跡の覆土から第１・２・３・５・６号住居跡は火を受けた跡が観察でき、炭火物や焼土が床面から多量に検出されている。

方形周溝墓

方形周溝墓は２基検出されているが、第１号方形周溝墓は辛うじて開口部を検出しているが、第２号方形周溝墓は開口部が調査区域外になってしまうため全容が分からず分類はできなかった。第１号方形周溝墓の形態は、Ｂタイプで周溝の一辺中央に開口部（ブリッジ）をもつもので、この遺跡内では最も多い部類である（註４）。開口部は中央よりやや西コーナー付近にあり、周溝が全体に円形になるものである。主軸は、当遺跡では最も多い南西方向となるものである。また、方台部は推定面積114.48㎡となり中型Ｂに位置付けられるものである。

以上が、第７次発掘調査の成果である。鍛冶谷・新田口遺跡において、とくに方形周溝墓は今回の調査により総数106基を数えるものとなり、発掘調査の回数を重ねるごとに数を増してきている。このような成果の大部分は従来からの墓制として取り扱ってきたものであるが、近年の方形周溝墓をめぐる研究の成果として「周溝を有する建物跡」という新たな研究の方向性が指摘されてきている。今後、調査を進めて行く過程で、あるいは既に検出されている遺構を再検討し、集落の姿を想像してゆきたい。

［註］

註１　ここでは、㈶埼玉県埋蔵文化財調査事業団により報告されている「鍛冶谷・新田口遺跡」において住居跡や方形周溝墓について分類されているので、その分類をもとにして位置付けをしておきたい。

西口正純　1986「鍛冶谷・新田口遺跡」埼玉県埋蔵文化財調査事業団報告書第62集　㈶埼玉県埋蔵文化財調査事業団

註２　このほかに、隅丸長方形・楕円形・円形がある。

註３　分類は面積から、大型（32.5～49.0㎡）、中型Ａ（23.5～28.6㎡）、中型Ｂ（14.3～19.3㎡）、小型（4.0～12.6㎡）に分類している。

註４　形態は、開口部（ブリッジ）の位置によりＡ～Ｈの８種類に分類されている。

［参考文献］

及川良彦：1998「関東地方の低地遺跡の再検討－弥生時代から古墳時代前半の「周溝を有する建物跡」を中心に－」『青山考古第15号』青山考古学会

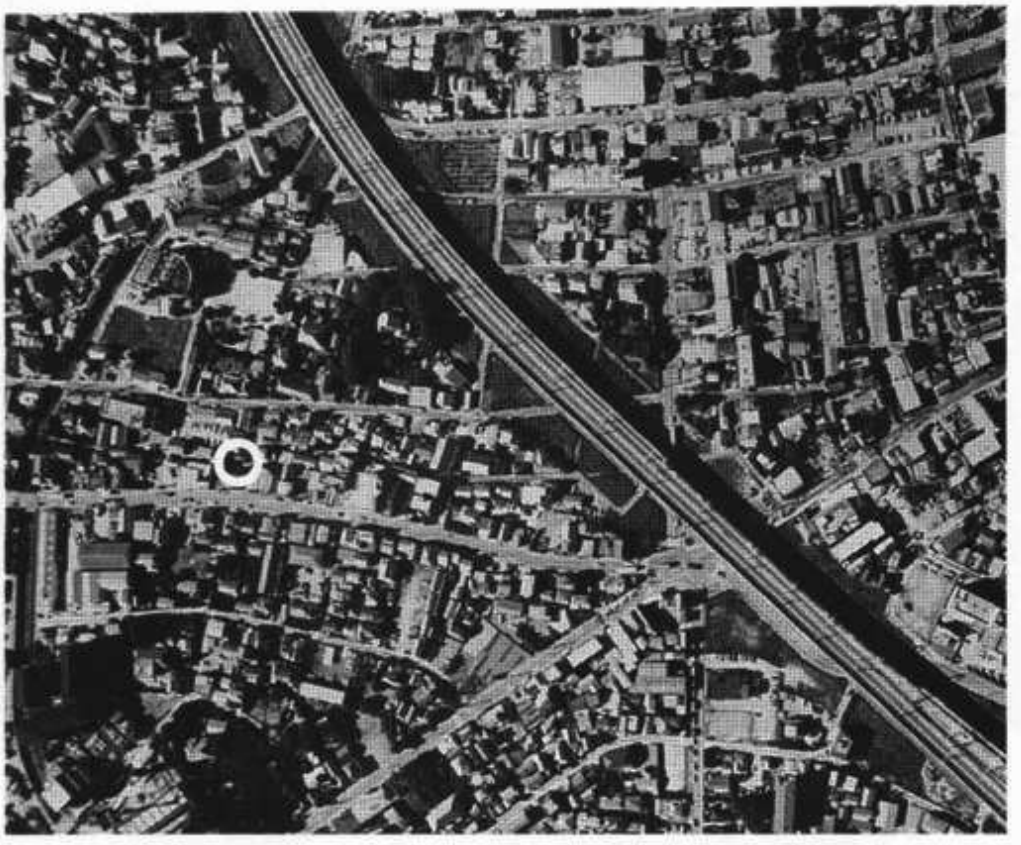
飯島良雄：1998「古墳時代前期における「周溝をもつ建物」の意義」『群馬県立歴史博物館紀要第19号』群馬県立歴史博物館

福田　聖：2000『方形周溝墓の再発見』㈱同成社

中島広顕ほか：1995『豊島馬場遺跡』北区埋蔵文化財調査報告第16集　北区教育委員会

中島広顕ほか：1999『豊島馬場遺跡Ⅱ』北区埋蔵文化財調査報告第25集　北区教育委員会

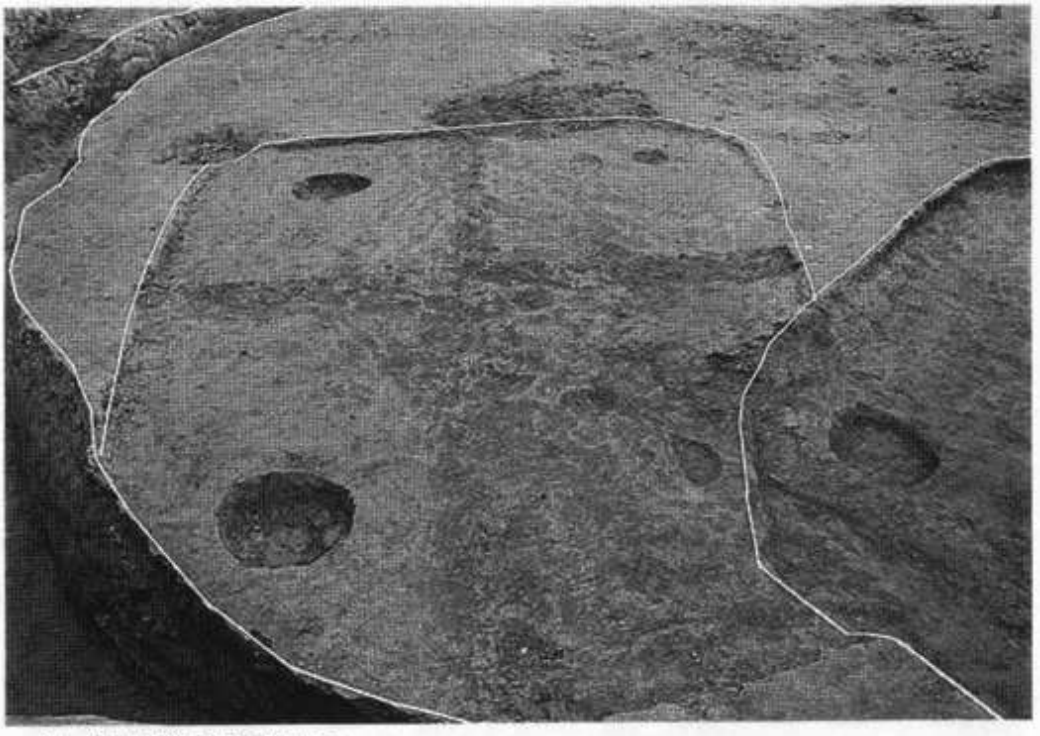
図版 1



(1)　鍛冶谷・新田口遺跡Ⅶの位置

(2)　調査区域南側を望む

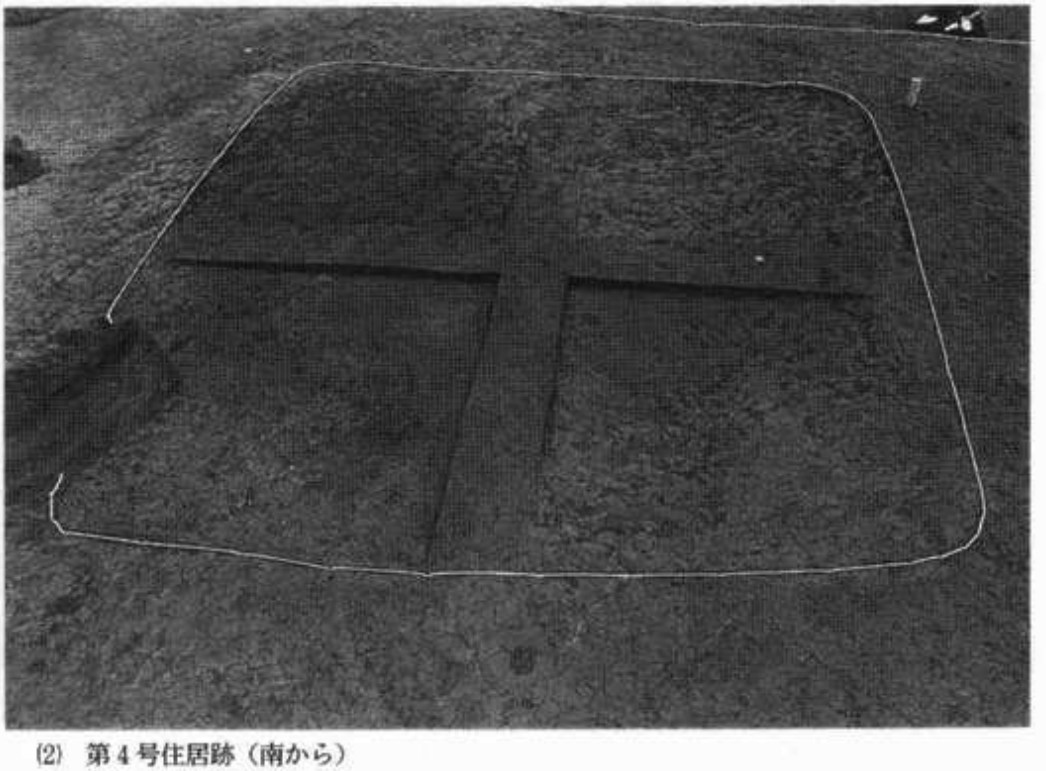
図版 2



(1) 第 1 号住居跡（西から）

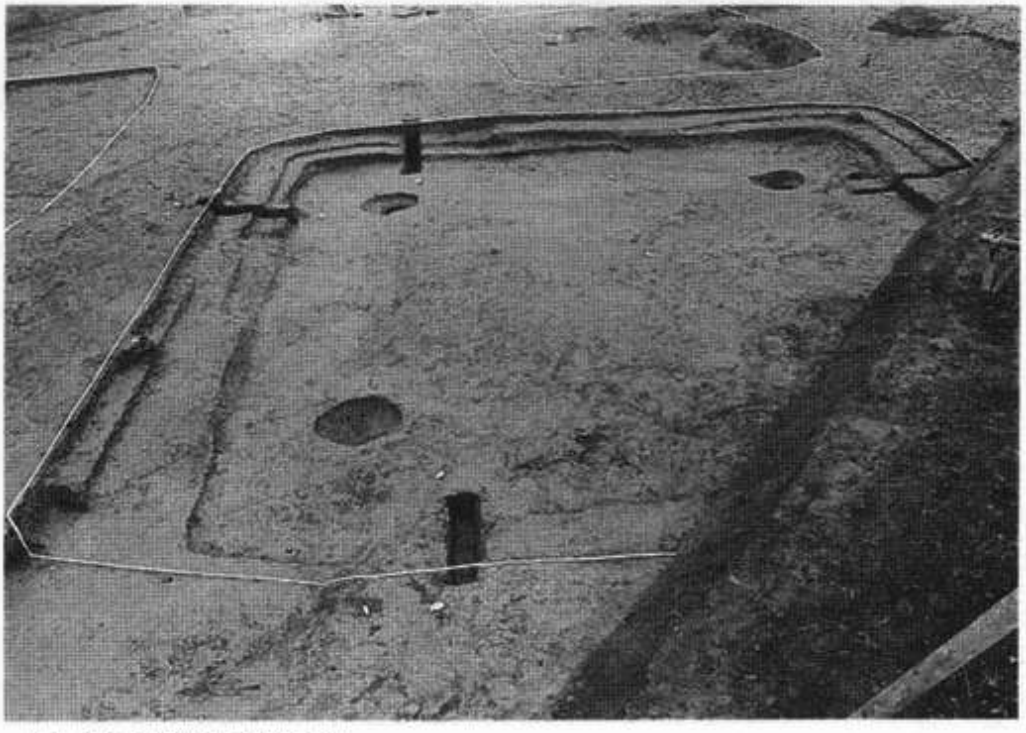
(2) 第 2 号住居跡（南から）

(1) 第 3 号住居跡（東から）



(2) 第 4 号住居跡（南から）

図版 4



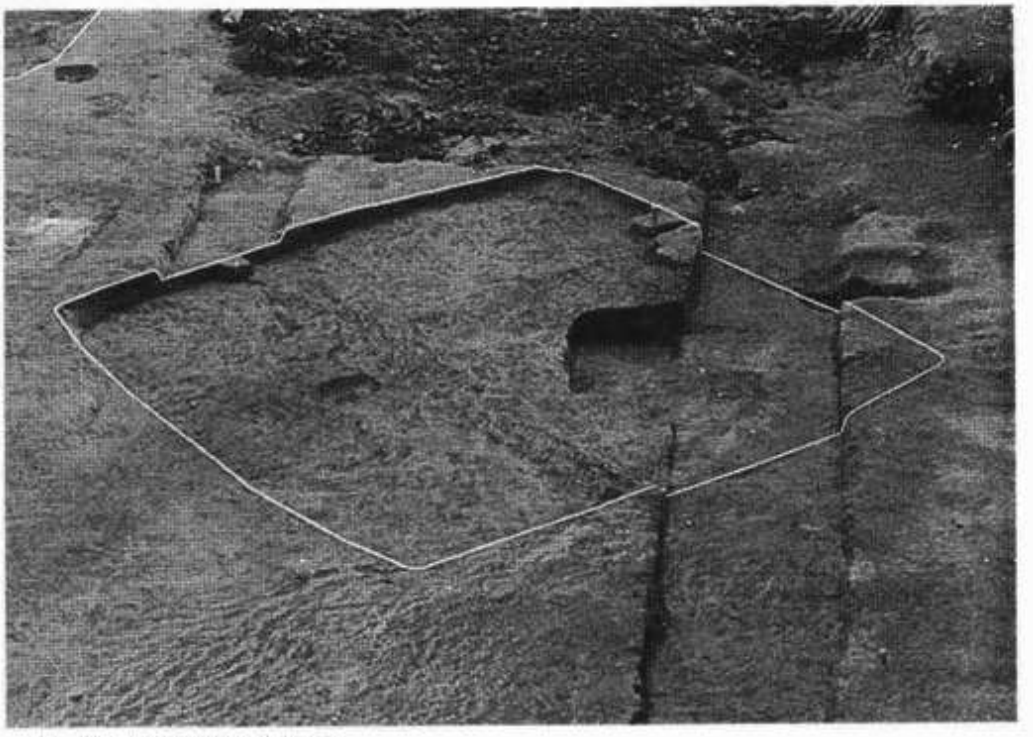
(1) 第５号住居跡（南から）

(2) 遺構断面ＳＰＡ北壁際

(3) 遺構断面ＳＰＢ西壁際

(4) 第５号住居跡調査風景

(5)第５号住居跡調査風景

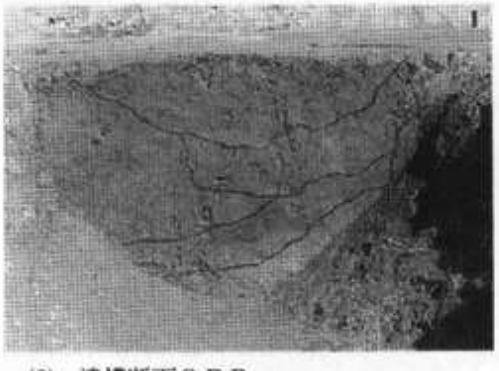


(1) 第 6 号住居跡（北から）

(2) 土器出土状況（第17図－１・３）

図版 6

(1) 第１号方形周溝墓（北から）



(2) 遺構断面ＳＰＢ

(3) 北側周溝

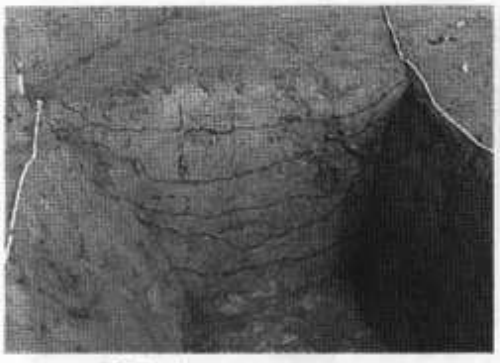
(4) 土器出土状況（第19図－２）

(5) 遺構断面ＳＰＣ

(1) 第２号方形周溝墓（北から）

(2) 土器出土状況

図版 8



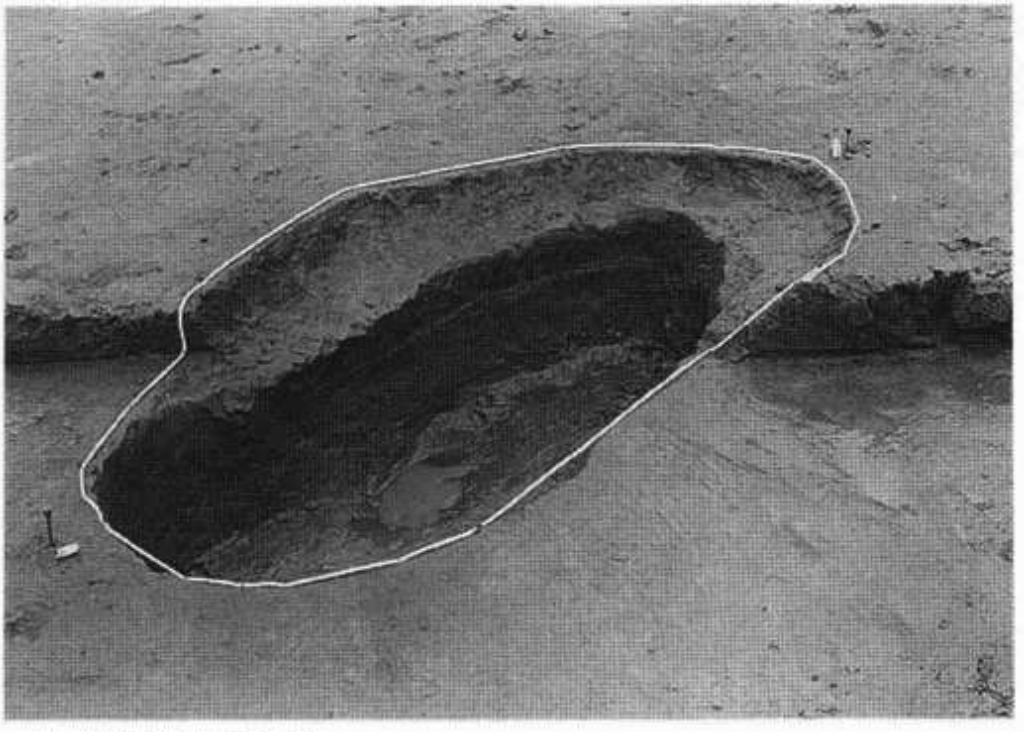
(1) 遺構断面ＳＰＡ

(2) 遺構断面ＳＰＤ

(3) 土器出土状況（第21図－３）

(4) 土器出土状況

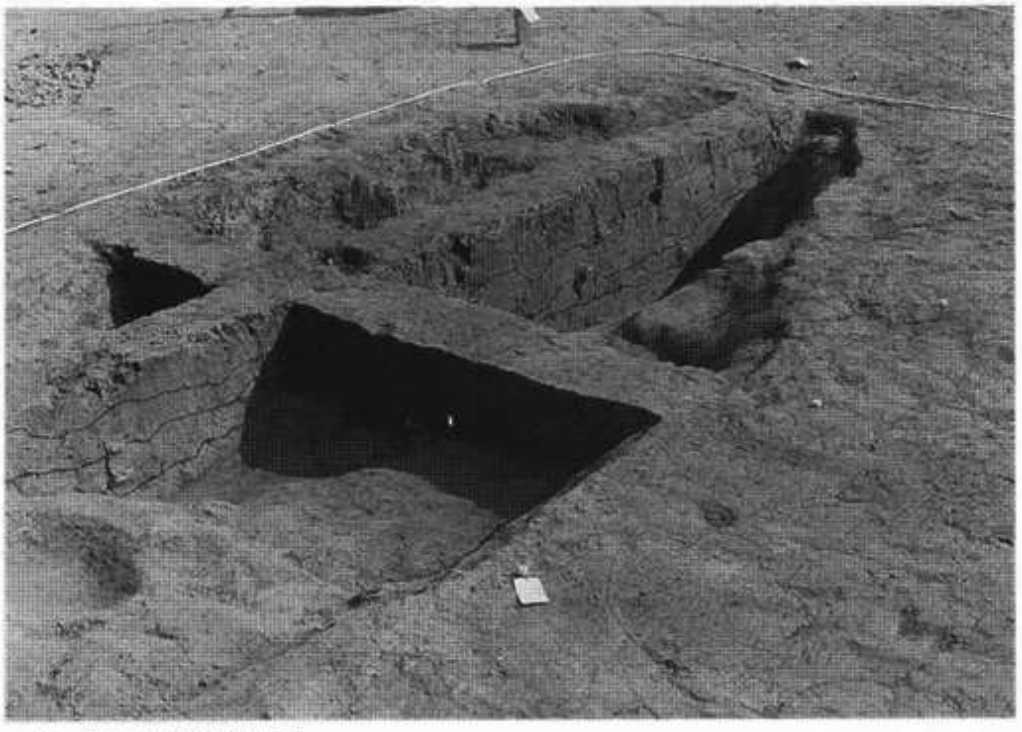
(5) 第２号方形周溝墓調査風景



(1) 第1号土壙（南から）

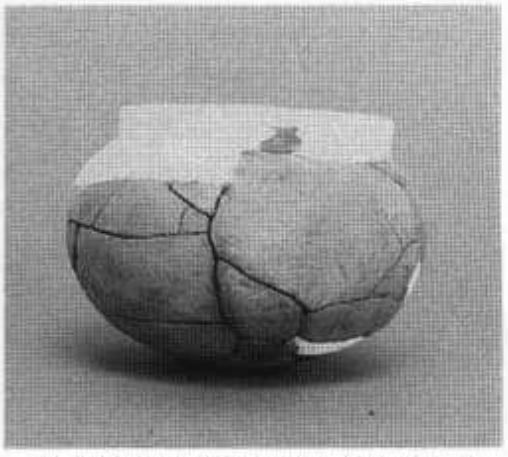
(2) 第2・3号土壙（南から）

図版10



(1) 第4号土壙遺構断面

(2) 第4号土壙調査風景



(1) 第1号住居跡出土遺物（第7図－1）

(2) 第1号住居跡出土遺物（第7図－2）

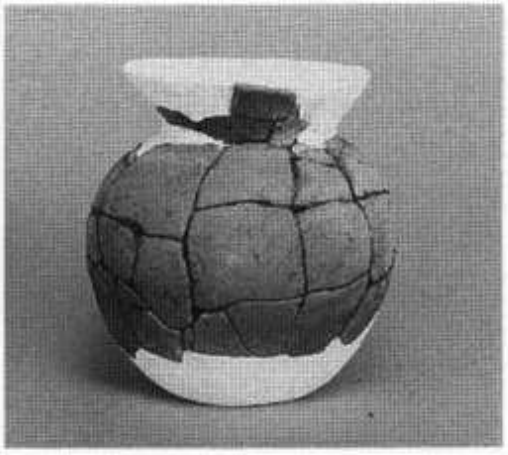
(3) 第1号住居跡出土遺物（第7図－4）

(4) 第2号住居跡出土遺物（第10図－1）

(5) 第2号住居跡出土遺物（第10図－2）

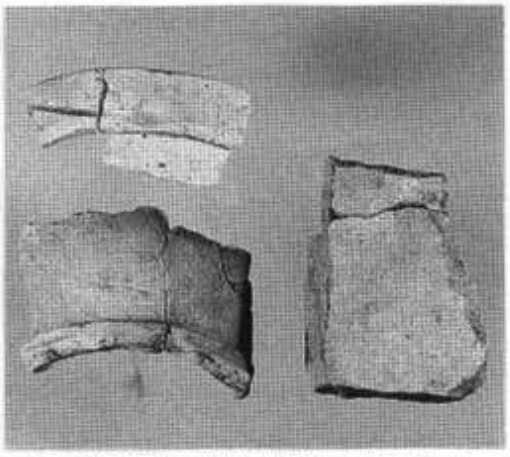
(6) 第2号住居跡出土遺物（第10図－3）

図版12



(1) 第３号住居跡出土遺物（第12図－２）

(2) 第３号住居跡出土遺物（第12図－３）

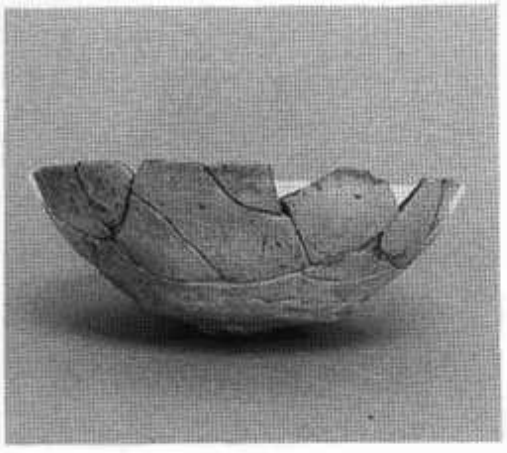


(3) 第３号住居跡出土遺物（第12図－１・４）
第６号住居跡出土遺物（第17図－２）

(4) 第５号住居跡出土遺物（第15図－１）

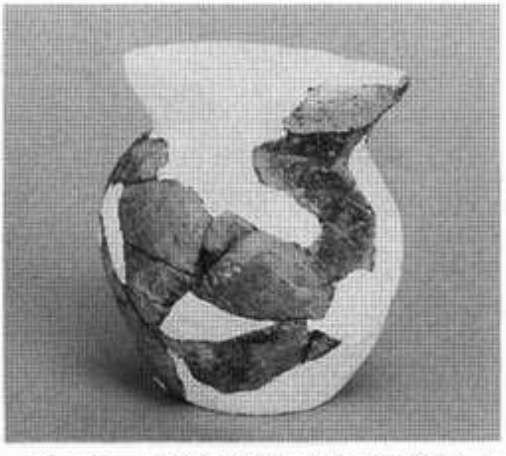
(5) 第６号住居跡出土遺物（第17図－１）

(6) 第６号住居跡出土遺物（第17図－３）



(1) 第６号住居跡出土遺物（第17図－４）

(2) 第６号住居跡出土遺物（第17図－６）



(3) 第１号方形周溝墓出土遺物(第19図－１)

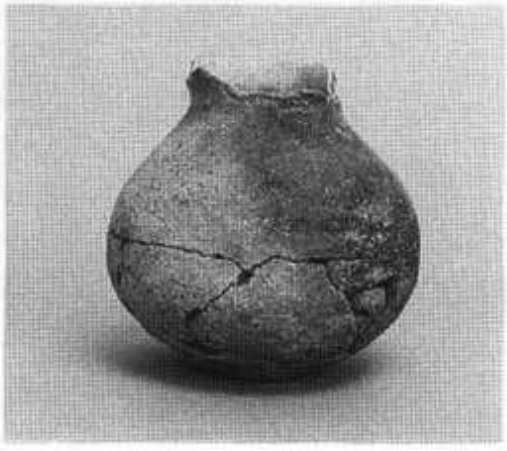
(4) 第１号方形周溝墓出土遺物(第19図－２)

(5) 第１号方形周溝墓出土遺物(第19図－３)

(6) 第１号方形周溝墓出土遺物(第19図－10)

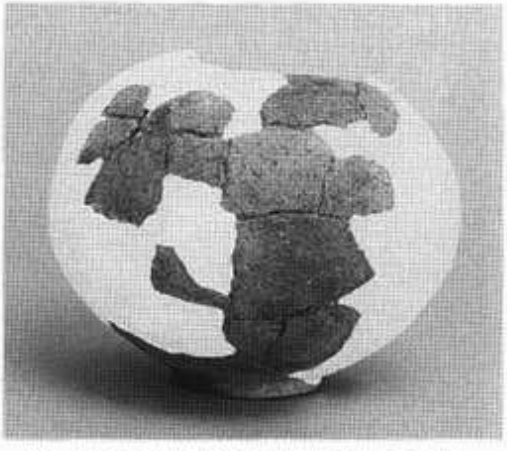
図版14

(1) 第２号方形周溝墓出土遺物(第21図－２)



(2) 第２号方形周溝墓出土遺物(第21図－３)

(3) 第２号方形周溝墓出土遺物(第21図－４)



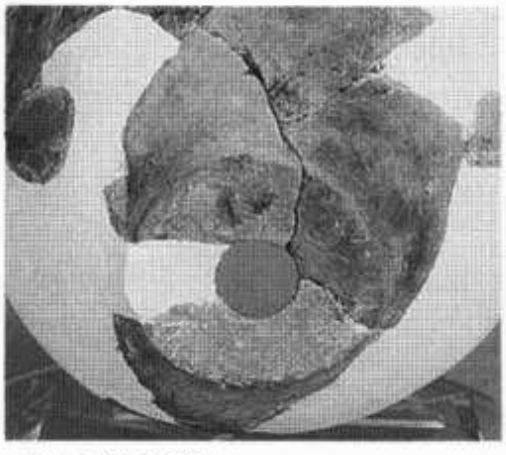
(4) 第２号方形周溝墓出土遺物(第21図－５)

(5) 第２号方形周溝墓出土遺物(第21図－９)

(4) 第２号方形周溝墓出土遺物(第21図－11)

(1) 第１号土壙出土遺物（第23図－１）

(2) 第２号土壙出土遺物（第25図－１）



(3) (2)甕の底部

(4) 第２号土壙出土遺物（第25図－３）

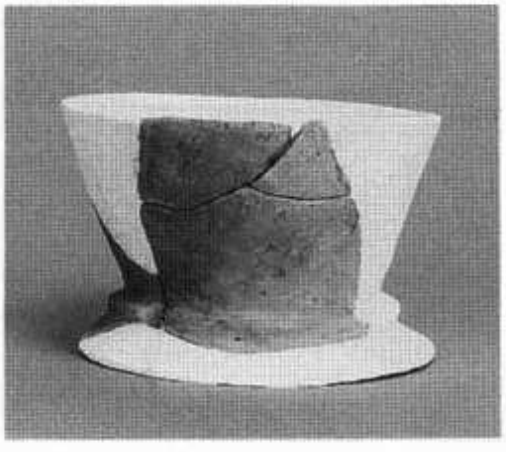
(5) 第３号土壙出土遺物（第26図－１）

(6) 第３号土壙出土遺物（第26図－２）

図版16

(1) 第３号土壙出土遺物（第26図－６）

(2) 第３号土壙出土遺物（第26図－８）



(3) 第４号土壙出土遺物（第28図－１）

(4) 第４号土壙出土遺物（第26図－３）

(5) 第４号土壙出土遺物（第28図－４）

(6) グリッド出土遺物（第29図－１）

報告書抄録

フリガナ	カジヤシンデングチイセキ		
書名	鍛冶谷・新田口遺跡 Ⅶ（第7次）		
副書名		巻次	
シリーズ	戸田市遺跡調査会報告書	巻次	第8集
編著者	小島清一		
編集機関	戸田市遺跡調査会		
所在地	〒335－8588 ,戸田市上戸田1－18－1　☎048－441－1800		
発行日	2001（平成13年）3月27日		

フリガナ 所収遺跡	フリガナ 所在地	コード 市町村	コード 遺跡	北緯 （°′″）	東経 （°′″）	調査期間	調査面積 （㎡）	調査原因
カジヤシンデングチ 鍛冶谷・ 新田口遺跡 （第7次）	トダシカミトダ 戸田市上戸田 5丁目25番6号	11224	001	35°48′30″	139°40′28″	平成9年 10月20日 ～ 平成9年 11月27日	814.51	共同住宅建設

所収遺跡	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項
鍛冶谷・ 新田口遺跡 （第7次）	集落	弥生～古墳 時代	住居跡　6軒 方形周溝墓　2基 土壙　4基	土器・石器	

鍛冶谷・新田口遺跡Ⅶ

埼玉県戸田市遺跡調査会報告書　第８集

発行日　平成１３年３月２７日

発　行　戸田市遺跡調査会
戸田市上戸田１－18－１
戸田市教育委員会内

印　刷　㈲石井印刷所
蕨市錦町２－６－１